



靖國神社みたままつり

平成21年7月13日宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された大小約3万個の懸け提灯や懸け雪洞が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかなう靖國神社「みたままつり」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13日、16

く照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。幽玄な中にも華やかなう靖國神社「みたままつり」は、今や都心で催される新暦の一大盆祭として定着しているが、昭和22年7月13日、16

日に、神社の正式行事として斎行されてから今年で満62年、63回目を迎えた。この「みたままつり」の由来や意義については、東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』（平成10年8月・PHP新書）や靖國神社社報「やすくに」第624号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、この「みたま祭」の由来と意義に関して、次のような興味ある記述があるので紹介する。

先ず、この「みたま祭」で慰霊されるのは、靖國神社の御祭神だけではなく、空襲等による一般戦没者も含まれるということである。

終戦直後の昭和20年9月、靖國神社を所管する陸軍省は「軍の解散前に、支那事変・大東亜戦争の為に死没した軍人・軍属等213万余柱の英霊」の「大合祀祭」実施を提唱する際、「敵の戦闘行動に因り死没したる者は、軍人・

報 特 攻

平成21年8月

第80号

財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

〒105-0014 東京都港区芝2-5-19T Aビル

電話 03 (5730) 1016
FAX 03 (5730) 1017

http://www.tokkotai.or.jp

振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

靖國神社宮司に
京極高晴氏就任

目次

靖國神社みたままつり……………1

「慰霊の泉」と「戦跡の石」……………3

靖國神社「みたままつり」に献納された懸け雪洞に見る特攻戦死の原田葉少尉の遺詠……………4

習志野市大久保に秋山好古大将の碑建立……………4

靖國神社宮司に京極高晴氏就任……………5

「遺骨収集・軍人墓地の管理は国の責任」と厚生労働大臣明言……………6

なぜかくも英霊の思いは忘れられ踏み躪られるのか……………13

【報告】軍人墓地の管理について……………14

船舶特幹の特攻戦歴……………16

真珠湾突入の軍神岩佐直治大尉を偲ぶ……………21

陸軍挺進部隊銘々伝⑤続新海希典少佐……………23

義烈空挺隊不時着生き残り熊倉順策君の逝去にあたり思うこと―サイパンの潜入課者を志願した人達……………25

殉國沖繩學徒顯彰六拾四年祭……………28

「沖繩慰霊の日」に思う……………30

義烈空挺隊慰霊祭……………31

赤い夕日の旧満洲紀行……………33

碑は語る特攻隊⑫……………35

特攻隊戦没者慰霊事業の戦後の歩み……………36

平成21年度春の南九州特攻慰霊巡拝「鹿屋、徳之島、東シナ海、洋上、枕崎」……………38

平成21年度第35回回荒鷲之碑慰霊祭に参列して……………41

平成21年度都市特別攻撃隊戦没者慰霊祭……………42

萬世特攻慰霊碑第38回慰霊祭に参列して……………43

平成21年度豫科練雄飛会慰霊祭……………44

第55回知覧特攻基地戦没者慰霊祭……………45

フイリピン特攻基地慰霊巡拝旅行のご案内……………46

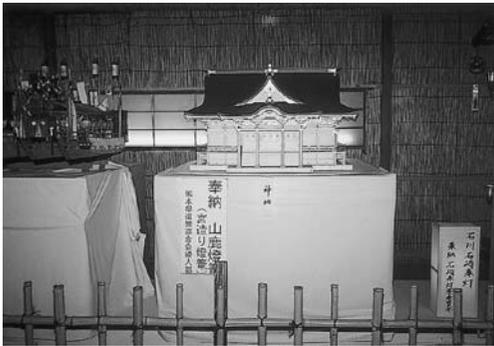
特攻隊長を偲ぶCD「鎮魂と懐古」―元少年飛行兵が作詞・作曲……………48

事務局からのお知らせ……………50

暑中見舞い・事務局からの報告等……………51



神門の仙台七夕飾り



熊本・山鹿燈籠



江戸風鈴

軍属に限定することなく全般的に合祀せらるゝことを要望した。それに対して宮内省は、「柱数・氏名不明の一般戦災者」を本殿に合祀することは適当でないが、そのような人々の「慰霊祭を（別所）実施せらるゝ場合は、行幸（親拝）を御願ひする」ことも可能と回答している。その結果、昭和20年11月20日、昭和天皇の行幸・御親拝を仰いで臨時大招魂祭が斎行された、ということである。ところが、その後間もない12月15日に、占領軍総司令部は「国家神道、神社神道二対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」という、いわゆる「神道指令」を傳達し、政教分離の名の下

に、特に靖國神社を攻撃目標として、精神面からこれをなきものにしようとした。しかし、国民の間には祖国のために身を捧げた戦没者の慰霊・鎮魂のことがまず第一に心にかかり、昭和21年7月、長野県遺族会の有志80余名が自発的に上京し、靖國神社境内の相撲場で、民謡と盆踊りの奉納大会が賑やかに催された。これに啓示されて、翌22年7月からは、神社の正式行事として斎行されるようになった、とのことである。そして、その発案に関し、民族学者の柳田國男翁（当時古稀）の関与が挙げられている。

柳田翁は、東京大空襲の直後から、日本の敗戦を見越して書き上げたとき、れるその著『先祖の話』の中で、日本人の「生死を超越した殉国の至情には、これを年久しく培ひ育て、来た社会性、わけても常民の常識と名づくべきものが、隠れて大きな働きをして」と指摘し、「国の為には戦って死んだ若人だけは、何としてもこれを仏徒の謂ふ、無縁ぼよの列に疎外して置くわけには行かまいと思ふ。・喜んで（英霊を）守らうとする（国民の）義務は、記念（憶）を永く保つこと、さうしてその志を継ぐこと、及び後々の祭を怒るにすること」だと提唱している。柳田翁は、兵庫県神崎の松岡家に生まれたが、長野県飯田の柳田家へ養子に入り、東京を中心に活躍してい

た。とりわけ長野の民族行事にも通曉し、民俗学を通じて県民に与えた影響力は強かったと思われる。翁が長野県遺族会の誰かに戦没者の慰霊のための盆踊りを靖國神社に奉納するように勧めたか、少なくとも相談を受けていた可能性がかなり高い、と所教授は指摘しておられる。「みたま祭」は「我が国古来の習俗」でもあるのである。

靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し戦域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執り行うことが慣例となつている。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社で合祀されていない「軍人・軍属等」も、また外地や内地で戦災（空襲・原爆等）により死没した一般の人々も、すべて一緒に慰霊することになった、とのことである。

一方、政府主催の「全国戦没者追悼式」は、日本遺族会などの早からの強い要望により、ようやく昭和38年5月の閣議決定を受けて、同年8月15日（停戦公表の日、月遅れの盆）に初めて実施されたが、これは前記靖國神社の「諸霊祭」を含めた「みたま祭」の



向かって左・鎮霊社

向かって右・元宮

延長線上にあるものと言えよう。右の閣議決定文には「今次の大戦における全戦没者（軍人・軍属及び準軍属のほか、外地において非命にたおれた者、内地における戦災死没者等をも含む）に対し、国をあげて追悼の誠を捧げる・・」とあり、しかも、「宗教的儀式を伴わない」と断りながらも、御臨席の天皇・皇后両陛下にあわせて「全国民が一齐に黙祷するよう勸奨」している。また、昭和39年の第2回追悼式は、靖國神社の境内で行われている。更に、「終戦二十周年」の第3回追悼式からは、規模を拡げて国立の日本武道館で実施されることになったが、その際、正面中央の標柱に「全国戦没者之霊」と明記され、それへの拝礼・献花が今日まで続いている。神道の立場から見れば、この標柱は、全戦没者の神霊が宿る神籬（ひもろぎ）の一種（神や御柱の類）にほかならない、と所教授は指摘しておられる。更にまた、同教授は、ともあれ、7月の賑やかな「みたま祭」と8月の厳かな「全国戦没者追悼式」が、これからも共に永く続けられるよう念じてやまない、と述べておられる。全く同感である。このことは、靖國神社に寄せる日本人の誠の心の表れである。

（飯田正能記）

靖國神社の外苑、大鳥居の北側の木立に囲まれた一角に「慰霊の泉」と「戦跡の石」がある。昼なお薄暗い余り目立たない場所にあるので、お気付きでない方もあろうかと思われるが、その碑の前に立つと、英霊への母の思い、そして数々の激戦地で死闘を繰り返した散華された英霊への思いに感涙が込み上げてくる。これらの碑はいずれも、昭和42年4月、明治百年を記念して「東京キワニスクラブ」から献納されたものである。設計井上武吉、施工北野建設株式会社とある。

○「慰霊の泉」と「戦跡の石」

「慰霊の泉」は、戦没者に水を捧げる母の像を象徴したとあるように、大東亜戦争、特に南方戦域の諸島嶼での激戦地では、どんなにか水に枯渇し苦闘されたことであろう。碑文に「戦没者の多くは、故国の母を想い、清い水を求めながら息を引き取りました。この彫刻は、清らかな水を捧げる慈愛に溢れる母を、抽象的に表現したものです。また、この母の像の外壁は、日本古来の宮や社にある固有の簡素なたたずまいを表します」とあり、背後の壁には写真に見られるように、硫黄島を始め9箇所の激戦地から採集された石が嵌め込まれている。

（飯田正能記）



慰霊の泉－戦没者に水を捧げる母の像

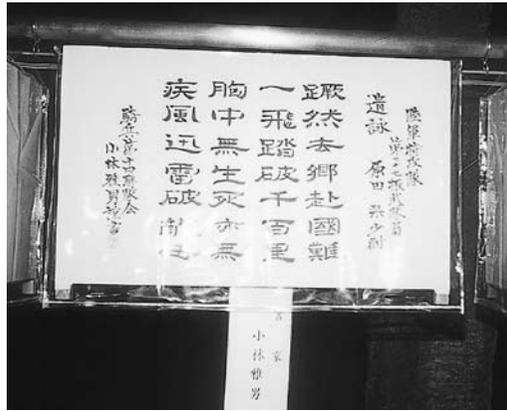


戦跡の石・向かって右より硫黄島・沖繩・マニラ郊外、ポニファシオ・コレヒドール・レエテ島、リモン峠・レエテ島、アルブレ・グアム島・ウェーキ島、プーゲンビル島

靖國神社「みたままつり」に 献納された懸け雪洞に見る 特攻戦死の原田葉少尉の遺詠

田中 賢一

献納者 小林 雅男



騎兵第十四聯隊会の小林雅男氏が献納したこの雪洞の遺詠は、当協会発行の『特攻隊遺詠集』にあるものを揮毫したものである。詠者の真筆の、もう一つについては、後で述べるが、この文面のもが何処に在るのか、私にはわからない。右の遺詠集の編集には私も参画したが、航空特攻については、取

り纏めた岩田辰夫氏が既に故人となつてしまったので、調べようがない。

第二十七振武隊は、2月14日明野で編成され、一旦、第五航空軍に配属されて大陸に渡つた。その後第六航空軍に配属替えとなり、知覧に到つたが、沖繩作戦の末期、知覧は空襲が激しいので、都城東飛行場から6月22日沖繩に向かつて出撃した。機種は四式戦。第二十七振武隊の絶筆集に、原田少尉は次の通り書き残している。

「征くものは気易い 残るものの心情にはホトトギスの慟哭がある 情は涙である そして愛は切ない されど忠はさらに至上だ 祖国よ永久に幸あれ幸あれ」



原田葉少尉

(原田葉 早大卒、特操一期)

左の真筆は知覧の特攻平和会館にある。「野畦の草召し出されて桜哉」



○習志野市大久保に

秋山好古大将の碑建立

田中 賢一



秋山好古大将の碑

この地には、昔、騎兵第1と第2旅団の兵営があり、京成電鉄の大久保駅から兵営に到る道路は、兵隊相手の商店街だった。今は兵営の跡は日大や東邦大等の学校になつていて、商店街は学生相手で存続している。

今年秋からNHKで司馬遼太郎原作『坂の上の雲』の大河ドラマが放映されるので、この土地に縁の深い秋山好古大将の碑を建てて町起こししようとして、商店街の人達が街の中央、薬師寺の前にこの碑を建てた。

私は士官学校予科を卒業し、士官候補生として騎兵第16聯隊に配属され、この地に縁を生じた。本科を卒業して騎兵第1旅団の第14聯隊所属となり、

支那に2年余りいたので、秋山旅団長の後裔ということになる。そのような次第で資料提供など建碑に協力した。

5月17日の除幕式に当たり碑に刻んである秋山将軍に敬礼してくれと主催者の要請があった。そこで私は、同じく船橋市に居住している山本博史さんを誘った。この人は幹部候補生出身の将校で、同旅団の第13聯隊にいて、私より4歳年長である。

当日は、習志野の自衛隊に頼んでラッパ手を4名出してもらい、軍帽がないので自衛隊の帽子を借りて被り、老兵2名、拳手の礼をし、ラッパ「海行かば」が3回響き渡つた。私らの後ろには県知事以下頭官が威儀を正して並び、碑に注目した。参列者は約200名であった。



碑に対し挙手の礼をする老兵2名

靖國神社宮司に 京極高晴氏就任

靖國神社は、6月12日、同神社の最高意思決定機関である総代会と宮司推薦委員会を開き、去る1月7日に急逝

された南部利昭前宮司の後任宮司に、京極高晴氏(71歳)を決定し、同氏は6月15日に靖國神社本殿で執り行われた宮司就任報告祭に参列し、引き続き到着殿「菊の間」で辞令交付を受けて、正式に同神社宮司に就任された。以下は、靖國神社社報「靖國」第648号(平成21年7月1日発行)に掲載された関係記事である。

「本年一月七日に急逝した南部利昭宮司の後任に京極高晴氏が決定し、六月十五日付で第十代靖國神社宮司に就任した。

豊岡京極家(旧子爵家)十五代当主でもある京極宮司は、昭和十三年一月十八日の生まれ、同三十六年に東京大学法学部を卒業後、日本郵船(株)に入社し、港湾物流部副部長、事業部長等の要職を歴任、平成三年からは水川丸マリンタワー(株)に勤務し、同七年に同社社長、同十一年からは関東東船(株)社長を務めた経歴を有している。

京極家は宇多源氏の流れを汲む武門

の名門で、尊父京極高光(十四代当主)は、元貴族院議員で宮内省式部官兼主筆官を務めた。また、母方の叔母は、昭和十八年八月二十一日にセレベス島(伏見宮博恭王第四王子、伯爵)夫人である。

この日、京極宮司は、山口権宮司奉仕のもと午前十時三十分から本殿で執り行われた宮司就任報告祭に参列し、英霊の奉慰顕彰の決意を込めて玉串を奉り、宮司就任の由を奉告、引き続き元宮、鎮靈社、司職神を拝した後、到着殿「菊の間」で小田村四郎崇敬者総代から辞令の交付を受けた。



小田村総代より辞令を交付される宮司

翌十六日午前、京極宮司は、社務所会議室で全職員を前に自己紹介を兼ねて挨拶を行い、その後、宮内庁、各宮

家に挨拶のため出向した。

宮司就任挨拶



この度、図らずも靖國神社第十代宮司に就任することとなりました。もとより浅学非才、神職経験も無い私に果たしてこの重責が務まるものか、今なおその不安は尽きることがありません。

しかしながら、父が戦前、宮内省式部官を務めたことや、母の妹が、伏見宮家より臣籍降下し、先の大戦で戦死された伏見博英海軍少佐に嫁していたことなど、靖國神社とは浅からぬ御縁があり、この大役をお引き受けする決心をした次第です。此の上は、御推挙いただきました崇敬者総代の方々をはじめ、全国の御遺族・崇敬者各位のお力添えを賜りながら、英霊祭祀の厳修に微力を尽くして参る所存です。

御高承のとおり、国家に尊い生命を捧げられた二百四十六万六千余柱の

方々の神霊を奉斎する靖國神社は、本年、御創立百四十年という節目の年を迎えております。この佳節に当たり、記念事業を発意された先代南部利昭宮司は、それら諸事業が順調に進捗している最中の去る一月七日、突如として逝去されました。その後任を仰せつかることとなりました私にとつての最重要事は、まさに南部宮司の御遺志を受け継ぎ、まずは記念事業を完遂することであり、将来に向けて神社奉護の基盤を確たるものにしてゆくことにあるかと存じております。

靖國神社を巡る諸情勢は甚だ厳しいものがありますが、私自身、日々の神明奉仕を通じて英霊祭祀の原点を考究しつつ、「致知格物」の心構えで、職員とともに御神威の発揚と英霊の奉慰顕彰に努めて参る決意です。

ここに重ねて関係各位の御支援、御教導を賜りますようお願い申し上げます。宮司就任の御挨拶と致します。

靖國神社宮司 京極 高晴

編注・「致知格物」——「格物致知」ともいう。格は究める、至るの意。物の道理を究め尽くして、知識が最高度に達することをいう。大学に「知を致すは物を格むるに在り、又物を格めて後知至る」とある。

「遺骨収集・軍人墓地の管理は国の責任」と厚生労働大臣明言

平成21年4月20日(月)午後、参議院決算委員会において、衛藤晟一議員(自民党)の質問に対して、舛添厚生労働大臣は、国の責任として遺骨を収集する、民間団体の参画に支援もやりたいと思っっている。また、軍人墓地の管理については、関係省庁と連携を取りながら、国の責任としてきちんと管理をしていきたいと答弁した。

以下は、当日の参議院決算委員会議録による質問と答弁の要旨である。

〈遺骨収集について〉

○衛藤晟一君 私どもがこうした自由と繁栄を享受できますのも、我が国の独立と自由のために尊い命を捧げられた先人の皆様のお陰だと思っっています。ですから、国のために殉じられた戦没者に対して心からなる追悼と感謝の思いを捧げるべきだと思っますが、残念ながら戦後60年以上経った今日になっても、戦没者の問題について未解決のまま残されている課題がございませぬので、この戦没者の問題に絞って本日は質問をさせていただきますと思っます。

まず最初に、海外の遺骨収集についてであります。先日、富士山の清掃登山などをしてるアルピニストの野口健さんから、ちょっとびっくりするお話を伺いました。先の大戦において、海外で亡くなった方は240万人以上に上るといふことですが、その約半数の御遺骨が戦後64年経った今日でもまだ日本に帰ってきていないということ

集収を担ってこられた戦友会や遺族会の皆さん方も大変高齢化してきておりますし、この際、これまでの遺骨収集の在り方を踏まえ、より一層遺骨収集体制を強化すべきではないかという具合に思っっております。

の邦人の方々が引揚げに際して本邦に送還したものを含めると、約125万柱の御遺骨が本邦に送還されていると、そういう現状でございませぬ。240万柱から125万柱を引くと残り115万柱ということになるわけですが、海外で収集可能な御遺骨はあと何柱ほど残っっているというふうに把握しているんでしょうか。

私も、日本青年遺骨収集団、現在のJYMA(注:「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」・英文表記「Japan Youth Memorial Association」)に若干関係しておりますので、海外の遺骨を収集するためには、言葉の障壁や遺骨に対する文化、慣習の違い、国民感情、そして現地の過酷な気候など、多くの困難を乗り越えなければならぬ

つごころから始まって、これまでの実績はどうなっっているのか、始めた当初からの担当部署と、遺骨収集数等の概要を説明していただきたいと思っます。

○政府参考人(及川桂君) 海外で収集可能な御遺骨についてでございますが、未送還の御遺骨約115万柱のうち、内訳を若干説明させていただきますと、約30万柱の御遺骨につきま

りでありませぬ。ですから、厚生労働省が外務省の協力も得ながら、とりわけ日本遺族会や戦友会の皆さんと共に関係政府機関を粘り強く説得しながら、一柱一柱懸命に遺骨を収集してこられたことに対し、心から敬意を表する次第であります。と同時に、野口さんからもお話を伺っして、これまでのように厚生労働省の担当部局の奮闘に任

せたいと思っます。海外での戦没者の御遺骨の収集についての経緯でございますが、昭和27年に当時の厚生省の外局でありました引揚援護庁によって始められて、その後組織としましては、担当する部署の名称が厚生省の引揚援護局、援護局と変更されましたけれども、現在の社会・援護局において実施しているという経緯でございませぬ。

中国ですとか、あるいは北朝鮮などと、相手国との関係、相手国の事情によりまして御遺骨の収集が困難な事情にあるという状況でございませぬ。こういふことから、現状におきま

したままでもいいのかと、これまで遺骨

が、国におきまして、海外戦没者約240万人のうち、これまで約31万柱の御遺骨を収集して本邦に送還しているわけでございます。

鋭意取り組んでいくべき対象となる御遺骨の最大数は、約59万柱というふうに見込んでいらっしゃると思っます。

○衛藤晟一君 遺骨収集の年度別実績

このほかに、陸海軍の部隊とか一般

を見ますと、最近、平成17年、18年

は、年に6百柱ほど、平成20年は、2千柱くらいということになっていますね。そうしますと、あくまでも単純計算ですが、収集可能と思われる御遺骨59万柱すべてを日本に帰還させるためには、年6百柱なら約千年、年2千柱なら約3百年掛かるといふ計算になります。海外での遺骨収集に多くの困難があることは十分に理解しておりますけれども、やはりこれでは、海外の御遺骨をすべて収集するつもりなのかと、本当に収集するつもりなのかと批判されても仕方ないのではないかという具合に思います。

海外の実績を調べても、例えばアメリカは、国のために命を懸けて戦った戦没者に対して、国を挙げて懸命に遺骨収集をされているようであります。アルピニストの野口さんもおっしゃっていますけれども、国のために亡くなった人に対してちゃんとフォローしなければならぬというように思っています。先の大戦におきまして、アメリカは、激戦地の一つでありました硫黄島で戦死した約5千名のアメリカ兵のうち、ただ一人だけ遺骨を収集できないということ、アメリカ政府は一昨年6月、その一人のために調査隊を派遣してきたそうです。キーブ・ザ・プロミス、戦没者との約束は絶対に守

る、というのがアメリカ政府の断固たる姿勢だそうでありまして、その姿勢が伝わってくるような気がします。

そこでお伺いしたいのですが、そもそも遺骨収集に対して政府はどのような方針で臨んできたのか、大臣にお伺いします。

○国務大臣(舛添要一君) これは、昭和27年以降、国の責任として遺骨収集をすると、これを一貫してやってきております。今後ともその方針が揺らぐことはございません。一日も早く、一柱でも多く遺骨を収集してまいりたいと思っております。

○衛藤晟一君 遺骨収集は国の責任だという具合に大臣から答弁をいただきました。全くその通りであります。国のために亡くなった戦没者の御遺骨を日本に帰還させるのは、まさに国の責務だと思えます。

しかし、実際は収集可能な御遺骨だけでも59万柱が異国の地で我々が来るのを待っているわけです。現在のペースなら最低でも3百年、長ければ千年掛かるわけです。これは、戦後懸命に遺骨収集に協力して下さった遺族会や戦友会の皆様に申し訳ないという気がします。何よりも、国のために亡くなった戦没者の皆さんの御遺骨を異国の地に放置することになるわけで

すから、許されることではないというふうに思います。

これは、国としての責任です。ですから、現状のペースを進めることは無責任のそしりを免れないと思うのであります。厚生労働省としてはどのような新たな対策を取る計画なのか、お尋ねいたします。

○政府参考人(及川桂君) 遺骨収集につきましては今後の方針についてのお尋ねでございますが、現状認識として、現在なお広範な地域に多くの御遺骨が存在しているという状況でございますが、戦後64年が経過するという状況の中で情報収集等の面で問題があるというように認識しております。こういった状況の中で、国として今後の遺骨収集を進めていくに当たりましては、まず第一に、民間団体などの方々と協力しまして、幅広い情報収集を行うなど、多くの方々の力を結集して取り組み、成果を上げることができるといふように考えていくことが重要であるというように考えております。このため、国として取り組んでいくわけでございますが、民間団体の方々と更によく話し合いを行って、より良い協力ができるように努力してまいりたいと考えております。

同時にまた、遺骨収集を海外において実施するわけでございますから、この取組を円滑に進めていきます上におきましては、関係する国の政府はもとより、現地の方々の理解と協力を得ながら実施していくことが不可欠でございます。したがって、国として相手国政府との協議など、国の責任において実施しなければならない環境整備につきまして、外務省とも連携して、特にしっかりと対応してまいりたいと考えております。こういった取組を通じて残された御遺骨を我が国に送還するために可能な手立てを尽くしてまいりたいと考えております。

○衛藤晟一君 年度別の遺骨収集実績によれば、平成19年は収集数が760柱だったわけでありまして、平成20年には2038柱という具合に3倍増となっているわけでありまして、このうち1060柱は、フィリピンで情報収集活動をしていた野口健さんたちのNPO、空援隊の情報のお陰だという具合に聞いています。それだけ実績を出している野口さんたちによれば、遺骨収集にとって一番重要なのは、当時の日本兵の行動を知っている現地の方々との連携だそうです。特にフィリピンの場合、戦争末期にはフィリピンのゲリラと日本軍との戦いだったそうで、どこでどのぐらいの日本兵が戦

い、玉碎したのか、現地の方々から聞くのが一番確かだというように思いますが。

しかし、戦後もう64年が経ち、当時のことを知っておられる現地の方々もどんどんお亡くなりになっておられます。あと5年が勝負だと思えますので、現地事務所を置くなど現地情報提供者対策を重視する方針を確立すべきだと思いますが、どうでしょうか。

○政府参考人（及川桂君） 私たちも野口さんの空援隊といった団体と最近よく話し合いをして、連携を深めているわけでございます。そういった中で、御指摘のとおり、遺骨の収集に当たって現地の情報が大変重要であるという認識を持っております。

そういった中で、具体的な取組としましては、私ども、平成18年度から、当初は3年計画ということでしたけれども、民間団体の協力を得て、フィリピン、東部ニューギニア、ピスマーク・ソロモン諸島といった地域において、海外未送還遺骨の情報収集を集中的、重点的に実施してきたところでございます。これまで3年間の事業の実施状況について分析しまして、改めて現地での調査体制の強化が必要であるというふうに考えておりまして、遺骨収集の促進につながる有用な情報を数多く

得るための見直しを、今回図ったところでございます。

見直しの内容といたしましては、今衛藤先生からも御指摘がございましたけれども、現地情報を重視するという観点から、現地の邦人や住民の方々の中からコンタクトパーソンとなる方を調査員として一定期間雇い上げて恒常的に情報収集に当たらせるといった取組、あるいは情報収集チームの派遣期間を長期間として、現地調査員と有効な連携を図るといったことができるような見直しを行って、現地調査の強化に取り組んでいくことにしているところでございます。

また、もちろん政府といたしまして、在外公館を通じて得た現地情報の把握、あるいは必要な際に政府が直接行う現地調査といったことも含めて情報の収集ということに特に重点を置いて取り組んでいきたいと考えております。

○衛藤晟一君 国の責任ということでございます。しかし、民間の方々もそれだけ努力をしておりますけれども、今は国の方もいろんな形で情報を集めるために配慮をされているということに民間の方々がございますけれども、更には認めるわけでありまして、更に民間の方々でこれだけ努力していることに対して、やはり応分の負担とい

うか、国の責任において本来やることを肩代わりしてやっていただいているという観点から、国費についての支援をもっとやらなければいけないという具合には思います。でなければやはり、進まないという具合に思っておりますので、これについては是非大臣に配慮をさせていただきたいというように心からお願ひ申し上げる次第でございます。

お話を伺いましたしておりますも、やはり戦後間もなくのころとか、占領後、27年からですから、日本が主権を回復して後というのは、遺族会の方々にお聞きしますと、大変な逆風の中というか、戦争のために亡くなった遺族だという形じゃなくて、悪いことをした人の子孫でしょうというような形でもって見られて、非常に苦

労されたということでございます。また、今は大変な時間が経ってしま

いましたが、それだけにやはり、国の責任においてやるんだという決意をもっと明らかにしていただき、そして費用の方も、もっとちゃんと負担していただくということが必要ではないかと思うんですね。民間民間ということ、実はほとんど民間のボランティアの上に、まだ全部お願ひしているというのが実情でございますので、その

ところの配慮を是非よろしくお願ひしたいというように思うわけでありまして。ですから、国の責任で収集するに以上は、その辺の体制と予算を更

にちゃんと見ていただきたいという具合に思う次第でございます。アメリカ等は、やはり海外の現地事務所等もちゃんと出しています。戦争捕虜行方不明者搜索統合司令部という専門の司令部を作り、タイのバンコクやラオスのビエンチャン、ベトナムのハノイとかそういうところに現地の事務所を開設しているんだそうでございます。そしてまた、法医学の専門家も集めて身元確認研究所というものを設立して徹底的な鑑定をやっているというところでございます。アメリカは、そういうことでは当然お金も掛かっているわけでありまして、アメリカの現在の予算は約、年間で50億、そして4百人以上の専門チームを抱えているのであります。

日本では、担当部署の予算は幾らぐらいで、担当人員は何人ぐらいなのか、一つ簡単ではありますけれども、数字だけでも明らかにしていただきたいと思ひます。

○政府参考人（及川桂君） 平成21年度におきます遺骨収集関係の予算でございますが、これはDNA鑑定に要す

る費用ですとかを除きました遺骨収集に直接要する経費ということで3億2千万円ということでございますが、これは前年度予算に比べて約8千万円ほど増額を認めていただいたという状況でございます。

また、所管する援護担当部局の職員数につきましては、非常勤の職員を含めて151人でございまして、このうち遺骨収集を直接所管しております外事室という組織の職員は29名でありまして、遺骨収集のための海外派遣に当たりましては、援護担当部局全体の職員が対応するという体制でやっているところでございます。

○衛藤晟一君 もちろんアメリカと日本では戦後の歩みも違いますし、単純に比較することはできませんけれども、予算で言えばアメリカは日本の16倍、それからスタッフの数も、外事室の29人ということで考えれば15倍ということになります。もちろん予算の額やスタッフの数ではないという意見もあるかもしれませんが、予算やスタッフが増枠されれば、やはり遺骨収集が進むことは間違いありません。

現に、昭和47年当時、予算が千三百万円、昭和50年に予算4億7千3百万円と増額したところ、収集数も3万6240

柱へと4倍に増えています。ですからやはり、国の責任で遺骨収集を強力に進めていくためには、現状の体制にプラスして、現地事務所を開設したり、専門の遺骨、遺品鑑定機関を設置する必要があったり、どうしてもそういうような予算面の増加と、それからスタッフの増員が必要になってくるというように思います。

最後に大臣の決意のほどをお聞かせいただきたいと思っております。

○国務大臣(舛添要一君) 先ほども

申し上げましたように、国の責任において遺骨を収集するというところで、私も、遺骨収集をなさっているNPOの方々にもお会いしました。大変頑張っていて、彼らの参画によって一気に数が増えていますので、この支援もやりたいというふうに思っています。

やはり、こういうことをきちんとやるということが国家としての責務であるというふうに思いますし、委員が冒頭におっしゃったように、今の平和と繁栄を築いた私たちの先輩に対する、そして、まだ外地で眠られている方々に対する責任であると思っております。

○衛藤晟一君 大臣のお言葉のとおりだと私も思いますので、是非、そのような基本方針に沿って体制を整備して

いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

〈軍人墓地の管理について〉

もう一点、国内の軍人墓地についての管理についてお伺いをさせていただきますかと思っております。

戦没者の御遺骨がまだ115万柱も日本に戻ってきていないという話をさせていただきました。しかし、日本に戻ってきた戦没者の方々が心安らかに眠っていたいただいているのかといえば、まだまだそうなっていないように感じます。今日、私は別に靖國神社の問題を話そうとしているわけではございません。実は、国内各地に、この靖國神社のことだけではなくて、軍人墓地というものがあります。その管理について今日は質問をさせていただきますかと思っております。

〔委員長退席、理事神本美恵子君着席〕

昭和37年から38年にかけて厚生省(現厚生労働省)が行った内部調査によりますと、全国各地に陸軍墓地が75箇所、海軍墓地が7箇所、計82箇所軍人墓地があるというようになっております。これらの軍人墓地は、明治以降、順次、全国各地に建設されまして、日清、日露、満洲、支那、それか

ら第二次大戦、大東亜戦争で亡くなった陸海の軍人の御遺骨が納められています。

戦前まではそれぞれが法令に基づいて管理をしていたようでございます。ところが、第二次大戦後、先の大戦に負けて、昭和20年12月に陸軍省、海軍省が解体されました。それで、軍人墓地を管理していました規則も、連合国、GHQによって、廃止をするということになりました。それで、やむなく軍人墓地の所有権は当時の大蔵省に移されました。その後、大蔵省は、昭和21年6月に事務次官通達を出して、墓地及び公園として使用することを条件に地方自治体に無償貸与又は譲与するという具合になりました。

そこで、ちょっと質問させていただきます。くわけですが、以後、無償で貸与された地方自治体はしっかりとその墓地を管理していると思っていれば、必ずしもそうではなかったようであり

ます。私は、昨年の8月に福岡市に所在する谷陸軍墓地を訪れ、お参りをさせていただきます。この墓地には、明治維新、日清、日露、支那事変、そして第二次大戦にかかわる、高さ約7メートルぐらい、幅が4メートル、奥行きが4メートルという大変立派な石碑が

幾つも建っていました。

うことでもございました。

財局長）先生がおっしゃられました

その維持管理は福岡市がしているというわけですね。

ところが、平成17年3月20日に起こった福岡県西方沖地震で、この石碑の土台がずれてしまったということでもございました。心配した地元の方々が他の箇所にも壊れているところはないかと、これらの石碑を詳しく調べたところ、土台のずれだけではなく、そ

うことで、民間の方々が仕方なく皆さんで寄附を集めたそうです。約1千百万円の寄附を集めて石碑のずれを直して、それから石室の中に腐らないようにくすのきの柵を作って、御遺骨の箱も新調して柵に安置し直したそうです。水没していた石室にも新たに排水設備も造ったりという具合に大変な作業だったようでもあります。

た全国82箇所の軍人墓地につきまして調査いたしましたところ、譲与等の処分済みの財産が29箇所、それから国有財産として無償貸付をしている財産が32箇所、その他国有財産として管理している財産が6箇所、不明のものが15箇所でございます。

この谷陸軍墓地について、隣接地を公園として使えるように一括して無償で貸与しています。国としては、この軍人墓地とともに公園用として国有地も無償で貸し付けているので、恐らく軍人墓地の管理はしっかりとてほしい、ということであるかという具合に思います。

の土台の下に石室があつて、それぞれ数百もの御遺骨が木の箱や壺に納められ柵に収容されていたのですが、中を調べたら、この柵が腐っている、あるいは柵が地震によって壊れて御遺骨が散乱していたというところもございました。私も、良くなった後でございますけれども、それを見させていただきま

ただけだったそうです。しかしながら、これらの、今ポランティアで管理しておられる方々も大変な御高齢になって、今回のような大修理はもとより、日常的な管理もこのまま民間に依存するというのは、大変な限界が来ているような感じがいたします。

思います。調査に時間も掛かるというわけですし、調査に時間も掛かると思えますが、例えば、現況が不明な箇所については、引き続き是非調査をお願いしたいというふうに思います。それでは、福岡市に所在する、先ほど申し上げました、谷陸軍墓地の所有者は誰で、また、誰が管理の責任者なのか、お聞かせいただきたいと思

この陸軍墓地及び隣接の公園の無償貸付については、貸付に際しまして財務省と福岡市との間で5年ごとに国有財産無償貸与契約書を交わしているということでございますけれども、この契約書では管理についてどのような規定となっているのか、お尋ねします。

したけれども、中には雨水がしみ込んで壺が水没しているとか、あるいは、木の箱に所属部隊名だとかお名前だとか戦没の年月日が墨で書かれていたのですが、消えてしまうというようなことにもなっていたようでもあります。

そこで質問をいたしますけれども、恐らく福岡市に所在する軍人墓地と同じような問題は全国にもあるんではなからうかと思われま

○政府参考人（中村明雄君）先生がおっしゃっております、福岡市に所在します谷陸軍墓地の土地につきましては、国の所有となっておりますが、福岡市に対しては国有財産法の規定に基づいて無償貸付をしているところでございます。この施設の維持管理につきま

○政府参考人（中村明雄君）福岡市との無償貸付契約の中の契約書がございまして、その第十一条第一項の規定におきまして、福岡市は、善良な管理者の注意をもって貸付財産の維持保全に努めなければならないとされているところでございます。

と危険ですから、そしてまた、御遺骨が散乱したままでは何よりも英霊に申し訳ないというように思つて、遺族会や戦友会の皆さんが懸命に修理するよう

○政府参考人（中村明雄君・財務省理

○衛藤晟一君 つま

○衛藤晟一君 それでは、福岡市に所在する谷陸軍墓地に係る契約書の第十一条には、福岡市は、善良な管理者としての注意をもって、今お話のありました貸付物件の維持保全に努めなければならぬと。そして、その次には、

支出する費用はすべて福岡市の負担とし、甲に対しですから、財務省に対しその償還等の請求をすることはできないとありますが、この意味についてお尋ねします。

そしてまた、日常的な管理や地震等で軍人墓地の工作物が倒れた場合、その修理を行うことも含まれているのかどうか、それについてもお尋ねします。

○政府参考人(中村明雄君) 国有財産の無償貸付は、民法上はいわゆる使用貸借に当たるものでございまして、民法上、使用貸借の場合につきましては、貸し付けた財産に係る善良な管理者としての注意義務をもって借受者は、貸付物件の維持保全に努めなければならぬというふうにされていますところでございます。契約書の第十一條の規定は、言わばそれを確認的に規定しただけのことでございます。

(理事 神本美恵子君退席、委員長着席)

なお、具体的にどういう形で維持修繕を行うかにつきましては、借受人である福岡市が民法の規定における善管注意義務の範囲内において検討されるべき事項と理解しております。

○衛藤晟一君 そうすると、この軍人墓地の管理に責任を持つ地方自治体は、この善管注意義務の範囲内で軍人

墓地の管理や修繕をしなければならぬということだと思えますので、この解釈についてですけれども、ほかの軍人墓地の管理について私が一部調べたところ、例えば、宮城県や愛媛県は、同じ国有財産貸付契約書の同じ善管注意義務条項に基づいて、軍人墓地の日常的な維持管理及び工作物の修復費用も県が負担しているようでありまして、同じ契約書の文面なのに、どうしてこのように対応が分かれているのか、財務省として、契約に際してその解釈を統一すべきではないかと思えますが、お尋ねします。

○政府参考人(中村明雄君) 無償貸付中の財産につきましては、それぞれの財産の事情を踏まえ、貸付相手方である地方公共団体におきまして、公園や墓地という貸付の目的、利用目的に沿った施設の維持管理を行っていたら、沿った施設を維持管理しております。

○衛藤晟一君 無償で国有財産を墓地及び公園として貸与されているわけでありまして、宮城県や愛媛県のように日常的な維持管理及び修復費用も地方自治体が負担するという解釈が普通であるというように思います。

ですから、福岡市は当然、陸軍墓地の維持保全に努めることが期待されているわけだというように思いますが、

ちなみに今回のような、石碑の土台のずれといったような問題について、貸与された地方自治体が修繕を拒んだ場合、所有者たる財務省としてはどのように考えられているのか、お尋ねいたします。

○政府参考人(中村明雄君) 一般論として申し上げますと、それぞれ借受け、無償貸付の相手方である地方公共団体は、先ほど申し上げたように、法律上、民法上、善良な管理者としてのいわゆる善管注意義務を負っているわけでございます。その範囲内で具体的な維持管理の方法を行っているものと理解しております。

○衛藤晟一君 それでは、国有財産は無償で公園として、あるいは墓地として貸し付けているわけですから、日常的な管理や工作物の修理は、管理者たる地方自治体の責任であるということ、5年ごとに国有財産無償貸付契約書を交わす際に是非、地方自治体にも徹底をしていただきたいと思えます。

今までであれば、いろんなボランティアの方々はずつとやっていたんでしようけれど、もうそういう方々も大変高齢になって、とてもできないんじゃないかと思うんですね。だから、そうしますと放置された状況になりますので、是非ともこういうことをやっ

ていただきたいと思えます。

それからまた、関連して、この福岡市と福岡財務支局との間に結ばれた契約書の中には、用途指定の履行状況を確認するために、財務省は実地調査又は実地監査を行うことができるという具合に書いてありますけれども、是非、これらの管理をめぐって問題が起こった場合に、この条文を援用して実地調査をすべきだと思いますが、そのことについてお尋ねします。

○政府参考人(中村明雄君) 先生がおっしゃっておられました契約書の第十三條の規定は、無償貸付中の財産につきまして、使用目的や使用上の制限等、用途指定の履行状況を確認する必要がある場合に監査ができるという規定でございます。

我々としても、そういう必要があると認めるときには実地監査等を行うこととしていきたいと思っております。

○衛藤晟一君 契約書に明記されているわけですから、この管理をめぐって大きな問題が起こった場合は、是非、財務省としてもその所有者としての責任があるんだということをはっきりしておかなければいけないと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

と言いますのは、先ほど申し上げましたけれども、残念ながら、無償貸与

された地方自治体の中には、予算を組んでしっかりと管理している地方自治体もあれば、軍人墓地としての尊厳を保つという発想もなく日常的な管理も放棄しているところもございます。

現に、民間の財団法人偕行社が全国に残っているこの墓地の管理状況について調査したところ、その多くは民間のボランティアによって草取りや清掃といった管理が行われており、全く管理されず荒廃した墓地も数箇所あったということでございます。

しかし、先ほども申し上げましたように、このボランティアをしてくださっている方の多くはもう高齢化してきておまして、もう限界であろうかという具合に思います。この数年、やはりこの際、国のために亡くなった戦没者の墓地なのだから、国でしっかりと管理してほしいという声を私もよく各地で聞きますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

しかし、そうは言うものの、確かに、全国の軍人墓地の管理が地方自治体に任された戦後の歴史を振り返れば、多額の経費が必要とされる石碑の修繕などというものは、地方自治体だけに任せっきりでいいのかという気もいたしております。国のために亡くなった戦没者の御遺骨を納めた軍人墓地の管理

を現状のまま地方自治体に委ね続けてもいいのかな、ということは、よくよく考えますと、こういう問題が起こるというのは、本来でしたらやはり、日本が主権を取り戻した昭和27年4月28日に整理すべきではなかったかな、という感じがいたします。

日本が先の大戦で敗北しまして、全国の軍人墓地を管理していた陸軍省、海軍省が解体されるということになりました。それで、昭和20年10月25日に陸軍省は「陸軍墓地ノ移管、忠霊塔ノ処理、及び日本忠霊顕彰会ノ監督ニ関スル件」という通牒を出しまして、その通牒におきまして、陸軍墓地は厚生省軍事保護院に移管するという具合に、指示を一度出しているようであり、厚生省軍事保護院とは、明治39年に傷痍軍人への医療や職業訓練のために設置された厚生省の一部局だそうでございます。軍事保護院という名前になったのは、昭和14年になっています。

ですから、昭和20年の10月25日付けでは、厚生省に全国の軍人墓地を管理せよという具合に指示が出たわけでありますけれども、それからすぐに、1箇半月もしないうちに、今度は陸海軍省が昭和20年12月2日に解体されて、同時に厚生省の軍事保護院も解体さ

れ、そして旧陸海軍病院を管理する保護院と医療局という具合に改組されてしまいました。そして、このときに傷痍軍人を特別扱いしてはならないという連合軍、GHQの指示により、そういう状況の中で一緒にこの軍人墓地を管理する予定であった厚生省軍事保護院はなくなってしまった。それで結局、

当時の大蔵省に一般財産として所管替えをされたというのが実情のようでございます。私も若干調べてみました。当が、そういう歴史が出てきました。当時のGHQも、とにかく日本軍を全面否定するんだということでやっていますので、全国の軍人墓地を、厚生省が所管するかということになったときに、やはり中央官庁が管理することを大変嫌がったようでございます。それで、日本政府も一般財産として大蔵省、そして大蔵省も、即そのまま地方に管理を委任するという具合にしたのが、歴史だったようでございます。

ですから、同じように、陸海軍病院も、いったんは厚生省軍事保護院に所管を移すということを決定したけれども、軍事保護院がなくなると、全国の陸海軍病院も軍人墓地と同じような経路をたどるわけでありますけれども、しかし、この医療施設というのは、当時でも大変な問題でございましたか

ら、日本政府はGHQとも交渉して、これらの施設において行う入院医療は、傷痍軍人及び家族に限定しないと認めるということをして厚生省への移管ようでございます。

その結果、今、国立病院、そして独立行政法人に至っているわけでございますけれども、このような経過を踏まえても、やはり軍人墓地の管理を厚生省に移管しようとしながらも、GHQの指示の下で大蔵省所管のまま地方自治体に管理を任せざるを得なかったというのが、どうも事の真相のようでございます。

ですから、そういう状況の中で、私も国会議事録を調べてみましたら、占領下の昭和23年の5月27日に、後に厚生大臣になった草葉隆圓さんという衆議院議員が、陸軍墓地の所管を厚生省に移すべきではないかという具合に問題提起をされております。ですから、どこで本場にどうすべきなのかということについて、私は改めて、やはり厚生労働省又は財務省は一回検討しなければいけないのではないかと、この思っている次第でございます。

戦後のいろんな歴史の経過もあるでしょうけれども、厚生労働大臣はそこを是非考慮していただいて、

将来どうすべきかということも含めて御検討いただきたいというように思います。大臣にこのことだけはお聞きしたいと思うんですが、どうでしょうか。

○国務大臣(舛添要一君) 大きな意味での戦後処理の一環ですから、これは関係省庁と連携を取りながら、国の責任としてきちんと管理をしていきたいと思っております。

○衛藤晟一君 是非、いろんな問題を引きずってきたところだと思いますけれども、やはり、何か地方に任せっきりでやっているというのは、ちゃんとしてもらえないというところもあります。本来、やはりこれは国の責任でやるべきことだと思いますので、今、大臣からお話がありましたように、是非ちゃんと話をして、整理をしていただきたいという具合に思っている次第です。どうぞよろしく願います。以上で終わります。

なぜかくも英霊の思いは忘れられ、踏み躪られるのか

標題は、産経新聞社発行の月刊誌『正論』平成21年7月号に掲載されている、当協会の山本卓真会長、参議院の衛藤晟一議員(自民党)及びアルピニストの野口健氏(祖父野口省己氏は第56師団参謀としてビルマ作戦に参加)による対談記事の題名であり、これには「戦没者を冒瀆してはばからぬ無礼な施策の数々。これでは誰が国のために献身するというのか」という副題が付されているが、前掲の「遺骨収集・軍人墓地の管理」に関する問題を始め、公益法人改革で無視された戦没者追悼、靖国神社訪問禁止通達とその失効等々、当協議会にとつての重要課題が論議されている。

その中からごく一部を摘録すると、次のとおりである。

◆遅々として進まない海外での遺骨収集

衛藤「厚労省を弁護するわけではありませんが、遺骨収集を政府派遣団に限定しているのは、海外の遺骨を日本に持つて帰るためには、現地政府と丁寧な交渉が必要ですし、現地の皆さんの理解も得る必要がある。かつて民間団

体が独自に遺骨収集をして現地の人々とトラブルになったことがあったそうです。ですから、政府間交渉もありません、民間の皆さんだけで現地に行つて遺骨を収集して持つて帰るといふわけには行かないという問題があるんです。」

野口「その事情はよく判ります。政府間交渉が大事なことは理解できますが、現場で発見したご遺骨が本当に日本人かどうかという政府の鑑定結果がないと日本に持ち帰ることができないという厚労省の方針については疑問があります。フリーピンでは、戦争末期にかなりの方が手榴弾による集団自決をされていますから、洞窟に一面、ご遺骨が木っ端微塵に飛び散つているという場合があります。こうしたケースですと、これは日本人のご遺骨で、これはフリーピン人のご遺骨かも知れないなどと鑑定するのは困難です。洞窟内に大量のご遺骨がある、つまり集団自決が予想されるという状況証拠や、日本兵の物と思われる遺留品などによつて判断することもあつていいのではないのでしょうか。どうしても丁寧な鑑定が必要だというならば、遺骨鑑定人の数を増やすといった措置をとればいいはずですが、厚労省には専門の遺骨鑑定機関もない。・・・」

◆遺骨収集が終わるまであと千年

かかる?

野口「・・・遺骨調査・収集に携わつて思うことは、わが国は国の為に亡くなった人に大変冷たい国だということなんです。国の為に亡くなった方々に敬意を表さない国はいずれ衰退していく。そんな思いを訴え続けたところ、昨年暮れに厚労省からフリーピンの活動に限つてですが、「現地の人の証言があればご遺骨を持つて帰つていいですよ」という許可を得ました。それで今年三月にも厚労省の遺骨鑑定人を派遣していただき収集してきましたが、その結果、空援隊として今回三月に四百十九柱、二月に約五百柱収集しましたので、一月から三月で一十柱を超えたんですね、今までの収集数の平均は全地域で年平均約六百柱ですが、やり方によつては二カ月間で一千柱を収集できるわけです。その気になれば、遺骨収集のペースは格段に上がるはずなんです。」

野口「・・・一方米国では年間五十五億円の予算を組んで国防総省の中に、現役、退役軍人、遺骨鑑定人など四百人も専門家チームを作つて調査・収集に当たつていきます。硫黄島でも先の大戦で約五千人の米国兵が亡くなつていて、そのほぼ全てを収集できているんですが、一体だけ見つかつて

いない。それで一昨年、その一体のた

めだけに硫黄島に捜索隊が入っている。

朝鮮半島やベトナムでもいまだに

米政府は遺骨収集をしています。国

の為に亡くなった人に対して、きちん

とフォローしなければ、今後、誰が国

の為に命を懸けるのかということにな

りますからね。」

山本「米政府の対応について知人に

調べてもらったところ、国防総省の「戦

争捕虜・行方不明者捜索統合司令部」

が担当していることが判りました。二

〇〇五年現在で湾岸戦争における一名

の米国人行方不明者、ベトナム戦争の

本来ならば、講和条約と共にGHQの

弾圧政策は帳消しにされるべきであっ

たんです。にもかかわらず、それを放

置した。その結果、あちこちに大きな

穴が開いているというのが今日のわが

国の姿だろうと思うわけです。

その結果が見事に現れているデータ

があります。二〇〇〇年に世界三十六

カ国の十八歳以上の男女千人に対して

実施した電通総研・日本リサーチセン

ターによる「世界価値観調査」によれ

ば、「もし戦争になったら国の為に戦

うか」との質問に「はい」と答えたの

は、日本は十五%で世界最低でした。

報告

軍人墓地の管理について

〔編注・平成21年5月28日付けで衛藤

晟一参議院議員事務所から、標記の事

項に関し、財務省及び厚生労働省の各

担当官の説明を受けた結果を報告して

きた。以下はその要旨である。〕

(担当官)

財務省理財局国有財産業務課

大臣官房専門調査官 浜尾一隆

厚生労働省社会援護局援護企画課

外事室室長補佐 佐藤 宏

〔1〕財務省関係

1 福岡市に対し、「契約書に基づき

適正な管理をしてほしい」と注意をし

財務省としてはどうしようもない。

3 国有財産は公園として無償譲与す

ることはできない。よって、公園と合

わせて無償貸付している現在の軍人墓

地32箇所については今後、法律が変

更されない限り、無償譲与することは

あり得ない。つまり国有財産のまま

である。

〔2〕厚生労働省関係

1 昭和37年に全国の軍人墓地につい

て厚生省が調査しているのは、昭和34

年に設立された千鳥ヶ淵戦没者墓苑に

納めるべき、身元不明のご遺骨を捜す

ためであった。現に千鳥ヶ淵戦没者墓

苑には、出所不明のご遺骨が納められ

ている。

2 今回の福岡市の場合を受けて、軍

人墓地を管理している地方公共団体に

対して「遺族の心情を鑑み、きちんと

した管理をしてほしい」旨のお願いを

出すことは検討している。

3 全国32箇所の軍人墓地を厚生労働

省所管とするための課題

① 厚生省は公園を持つことができ

ないので、厚生省所管となると、隣接地も

公園として使用することができなくな

る。

と」と明記されています。」

◆原因はGHQの占領政策

山本「お話を伺っていると、戦後GH

Qが日本軍と戦没者追悼の心を徹底的

に抹殺しようとしたことがよく判りま

す。陸軍省と海軍省の解体、軍隊の廃

止、戦没者慰霊祭の主催禁止、公務員

の参列も禁止、子供たちが靖国神社や

護国神社を訪問することも禁止、そう

した占領政策の影響で現在の、軍人墓

地や遺骨収集の問題が生まれてきた。

◆国家の大穴を塞がねば

以下紙面の都合上、項目のみ列記す

るが、戦没者の慰霊顕彰を目的とする

当協議会にとっての重要課題でもある

から、是非御一読願いたい。

◆管理者がいない軍人墓地

◆朽ち行く海外の慰霊碑

◆公益法人改革で無視された「戦没者

追悼」

◆原因はGHQの占領政策

◆靖国神社訪問禁止通達とその失効

◆かくばかり醜き国となりたれば

る。そして、厚労省所管の行政財産でなければ、修繕費用を出すことはできない。

このため、海外の、民間が建立した戦没者慰霊碑についても、その管理費用を出すべきだと言われたが、財務省の了解を得ることができなかった。そこで、民間の慰霊碑を国の慰霊碑に整理・統合する、つまり、国の慰霊碑の拡充という名目で、現在は費用を出している。

※ 千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、国立公園という位置付けにして、環境省の所管（行政財産）となった。厚労省は納骨室の管理と拝礼式を実施し、清掃等は、財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会が協力している。

↓ 軍人墓地部分だけを厚労省所管とすることは可能ならず。

② 厚労省の戦没者慰霊行政は、シナ事変以降の戦没者に限定しており、日清・日露戦争までは及ばない。

※ 厚労省の佐藤室長補佐

遺骨収集等について、先の大戦の戦没者を対象としていることに法的な根拠はなく、その他援護行政全体として、次のような考え方でやっている。

・遺骨収集については、昭和27年の国会決議が先の大戦を想定して決議されていること、

・その他の遺族援護についても、援護法等の法体系において、昭和12年7月7日の日華事変以降を対象としていること、

・全国戦没者追悼式も、閣議決定に基づき、日華事変以降の戦争による死没者を対象としていること等から、援護行政全体として先の大戦に係るものしか扱っていない。

↓ シナ事変以前の戦没者については、閣議決定で全国の軍人墓地の管理を国の責任で実施すると決定すればいいことだが、確かに靖國神社との関係、また、西南の役や台湾出兵などをどう見るか、など歴史観に絡む難しい問題が起こる恐れがある。

③ 行革法などで人員と予算が削減傾向にあるとき、全国の軍人墓地の管理に人員と予算を出す余裕はない。

↓ 厚労省設置法に新たな業務を書き込み、予算と人員を確保するしかないか。

④ 厚労省の所管となると、政教分離

の関係で、忠魂碑訴訟の問題などが再燃する恐れがある。靖國訴訟などを抱えている厚労省としては、忠魂碑撤去訴訟などを起こされる恐れがある懸念事項を抱えたくない。また、忠魂碑などを撤去せざるを得なくなる場合も出てくるかもしれない。

↓ 現行憲法第20条の下で、訴訟を抱えざるを得ない状況は大変だと思

⑤ 全国の軍人墓地に納められている御遺骨は、戦友と一緒に眠る軍人墓地に祀りたいという遺族側の願いを受けて納められたもの。いったん遺族に返された御遺骨を国が管理すべきなのかどうか。むしろ、遺族会や郷友連盟、偕行社などに管理をお願いできないかと思っている。

↓ そうは言っても、戦前は国が管理をしていたし、終戦後も厚生省軍事保護院に管理させる方針だった。

し、「軍人墓地の管理」又は「旧陸海軍の施設等の管理」を追加。新法も必要か。

※ 新法を作るとなると、靖國神社をどう位置付けるのか、どこまで遡るのか、追悼懇の国立追悼施設問題をどうするか、民間人と戦没者の混在する墓地についてはどうするか、などの整理が必要。

2 地方公共団体の管理

※ 厚労省の行政財産とならない限り、軍人墓地の維持管理に、厚労省が予算を出すことはできない。

3 民間の財団法人等の管理

① 資金をどうするか。
② 国との関係をどう担保するか。法人のトップに元首相や皇族を戴くなどの措置が必要か。

【3】今後の方針案

1 国の管理

① 厚労省管理↓閣議決定か新法（戦没者墓地管理法？）制定が必要。

② 防衛省管理↓防衛省設置法を改正

船舶特幹の特攻戦歴

陸士55期 吉村 勝也

〔編注〕本稿は、平成21年3月7日、

横浜市で開催された神奈川陸士61期生
会平成21年度総会において、「船舶特
幹の特攻戦歴」と題する記念講演をさ
れた、講師の吉村勝也氏（陸士55期・
元陸軍船舶海上挺進特設第51戦隊長）
から当日の講演資料として配布され
た手記等（元特設第51戦隊長・船舶特別
幹部候補生二期生久慈旭氏記述のもの
と同戦隊長吉村勝也氏記述のもの）
であるが、陸軍海上船舶特攻に関する
貴重な資料でもあるので、関係者のご
了承を得て転載させていただいた。

○陸軍船舶特別幹部候補生隊 の創設と概要

昭和17年後半から米軍の大反撃によ
り南方戦線の占領地域は次々に奪還さ
れ、日本軍は過去に例のない損失を続
けながら後退の一途を辿り、戦局打開
のため、戦闘力を強化する必要から、
勅命をもって昭和18年12月、陸軍に特
別幹部候補生の制度が創設された。

船舶兵科特別幹部候補生は、昭和19
年2月初旬に採用試験が行われ、大正

13年4月2日以降昭和4年4月1日ま
での出生者で、救国の至情に燃える学
業半ばの少年達2万数千名が応募し、
3800名が難関を突破して合格の栄
冠を勝ち取った。教育施設の収容能力
のため、大正生まれから第一次入隊者
（一期生）1890名が同年4月10日
に入隊した。4カ月間の教育訓練を修
業し、同年8月25日付で船舶練習部に
1705名が配属され、海上挺進戦隊
要員となり、水上特攻訓練が開始され、
2カ月の猛訓練を経て、比島、台湾、
沖縄方面に逐次出陣した。残りの
185名は、船舶工兵聯隊、原隊指導
候補生に配属された。

一期生と同時に合格した二期生19
10名は、昭和19年9月10日に新設さ
れた香川県小豆島の船舶兵特幹隊に入
隊し、中堅幹部教育の一期検閲、二期
検閲を終了し、翌20年1月12日に修業
した後、船舶専科部隊である船舶工兵
聯隊・船舶整備教育隊・船舶通信聯隊・
船舶情報聯隊・海上駆逐大隊・機動輸
送大隊・潜水輸送教育隊にそれぞれ選
抜配属された。

三期生2130名は、20年2月11日
に入隊し、5月29日に修業して情報聯
隊、船舶砲兵聯隊、通信聯隊、船舶工
兵聯隊、船舶練習部へと配属された。
四期生2100名は、20年6月11日

に入隊し、同月末に430名が通信
情報、船舶砲兵に転属となり、残り
1670名は若潮特幹隊で教育中に終
戦となった。

一期生の戦死者1636名（比島、
沖縄）、二期、三期、四期生の一部は、
皇土防衛軍として連日の空爆撃及び広
島原爆により55名の犠牲者を出した。
愛国の至情に燃えて、青春なき戦争
に散華した少年幹部候補生の御霊安か
れと祈るばかりである。

○陸軍海上挺進隊と特設第51 戦隊の概要

南方戦線の制空・制海権を失い、最
後の決戦場を比島、台湾、沖縄に求め、
類勢を挽回するべく昭和19年8月9日
付、軍令陸甲第一〇七号による船舶戦
闘参加令を指令し、上陸作戦担当の陸
軍船舶部隊を、海上戦闘戦の攻撃第一
線に活用する事になった。その作戦要
領は、敵上陸地点の泊地に入った敵船
団に対し、深夜、攻撃艇による肉迫攻
撃を敢行し、一艇をもって一艦一船を
屠る特攻作戦を執行するものであつ
た。

編成は、戦隊長には陸士出身の20歳
代後半の大尉、少佐を充て、中隊長に

は同じく陸士出身の20歳代前半の中尉
を、小隊長には甲幹出身の少尉、見習
士官を、一般隊員には19年4月入隊、
8月修業の船舶特別幹部候補生第一期
（当時17歳から19歳）の少年兵を主力
として充当した。

1個戦隊は、攻撃艇（ベニヤ板製1
人乗り）100隻、戦闘員104名、
整備中隊及び基地設営大隊900名の
部隊である。艇の長さ5・6メートル、
幅1・8メートル、エンジン80馬力、
速度23ノット、航続3・5時間、
装備250キロ爆雷1個搭載の水上特
攻艇である。

第一次の編成は、昭和19年9月から
11月に30個戦隊が、比島に16、台湾に
5、沖縄に9戦隊配備されたが、その
うち19個戦隊が特幹1期生で編成され
た。台湾及び比島方面に出陣した戦隊
の輸送船団が米軍潜水艦の攻撃を受け
て沈没し、多くの犠牲者を出したが、20
年1月の比島リングエン湾沖の攻撃に
始まり、3月末までの沖縄戦を通して
壮烈鬼神も哭く深夜の肉迫攻撃を敢行
し、敵艦船10隻を撃沈・大破する戦果
を挙げ、一片の肉もとどめず、南海を
血で染めて悠久の大義に殉じたる者、
また、戦局の赴くところ、己むを得ず

陸上戦闘で奮戦を続け、草むす屍と散
華した者実に1743名を数え、その

うち1614名が1期生の少年特攻隊員であった。また、各戦隊所属の基地大隊も陸戦により1万8752名の犠牲者を出した。

第二次編成は、昭和20年4月以降7月までに23個戦隊が編成され、船舶司令部直属の特設第51及び第52戦隊と各方面軍司令官隷下の10個戦隊は、国土防衛軍の第一戦に配備され、残り11個戦隊は江田島幸の浦基地で訓練中に終戦となった。この残留戦隊は、8月6日広島に投下された原爆の救援部隊として出動し、全員二次被爆者となり、戦後多くの犠牲者を出すに至った。

○特設第51戦隊の概要

沖繩戦の終盤期を目前にした昭和20年4月に入り、第二次編成が皇土防衛のために再開され、1月12日に特別幹候隊を修業し各船舶専科部隊に配属された2期生及び5月修業予定の3期生を動員する事になり、この転属は6月を予定した。この第二次計画に先駆けて船舶司令部は、直轄戦隊を独自に編成するべく4月20日、専科部隊の海上駆逐大隊、機動輸送大隊、船舶工兵九聯隊の2期生から、第一選抜で各28名、総勢84名を船司練習部に出向を命じ、同時に鯛尾の整備教育隊から整備要員の1期残留者と2期生20名を出向させ

た。

練習部第10教育隊に集合した候補生は、翌日から上陸用舟艇の大発を操船し、連日宇品港船舶司令部から糧秣、兵器、資材を江田島幸の浦基地に輸送し、夜間は特攻艇の戦闘訓練を続行し約1カ月が経過していた。5月下旬からの訓練は、昼間は学科と機関構造、夜間は航行と突撃訓練に集中、6月5日司令部直轄戦隊として編成された。これが特設第51戦隊であるが、旬日を経過して編成を縮小し、2個戦隊となり、特設第52戦隊が編成された。

編成は、戦隊長以下165名(本部15名、戦闘隊57名、整備隊40名、基地隊53名)、舟艇50隻、爆雷50個、軽機関銃、小銃、器材若干数であった。

特設第51戦隊の誇りは、他の一般戦隊と異なり、各方面軍司令官の隷下ではなく、船舶司令官の直轄であることと、小豆島特幹隊の第2中隊長であった吉村勝也大尉が着任された事であった。

2期生の同期の校で固められ、恩師が再び隊長になられたことにより、隊員の胸中は明るさに満ち溢れていた。また、将校、下士官も関東軍出身の方が多く、力強い限りであった。

6月20日、完全装備を完了した戦隊は、司令部の激励を受けて軍用列車で

行く先不明のまま鉄路を進行した。翌朝、列車は博多の操車場に停止、陸路駐屯地の今津浜にある法教寺と清教寺の二寺に到着した。訓練は、沖合の能古島に座礁している金剛丸6千噸を目標船として、連夜猛訓練を続行していたが、8月15日、玉音放送で終戦となり、武装解除の上、8月31日に司令部命により広島駅に到着。

6月までの広島市の街も駅舎も全く無く、焼土と瓦礫の山と化していた姿を見て、想像を絶する戦争の悲惨さを感じた。屋根も無い駅に待機し、宇品船舶司令部からの連絡指示を待つこと3時間、もたらされた命令は、直ちに駅頭で解隊し、各原隊に復帰せよとのこと。

吉村戦隊長の涙ながらの訓示を受け、将来の再会を誓い、原隊に向け出発した。

特設第51戦隊は、秘密部隊のまま世に出ることもなく、この日をもって消滅した。然し、隊員はそれぞれの郷里で戦後の復興期に良識ある社会人として活躍し、20数年の歳月をかけて連絡、調査を続け、今回で25回の戦友会を開き、隊長、上官と共に56年間の空白を語り合っていることを喜びとするものである。

165名の戦隊員は、現在健在な者

81名、物故者49名、消息不明の者35名で、戦隊として隊旗を靡かせ、特設第51戦隊いまだ健在を物語る証左と自負している。

私達が現在あることは、あの悲惨な戦争の犠牲となった数多くの同志の陰であり、その雄叫び、その愛国の情熱を忘れることなく、国の繁栄と平和のために生ある限り微力を尽くして参りたいと念願すると共に、靖國の御霊の永久に安らげく神鎮まりますことを祈り続けるものであります。

平成14年5月

元陸軍船舶海上挺進特設第51戦隊

戦隊員 久慈 旭 記

◇ ◇ ◇ 『昭和20年8月15日・終戦の詔勅を拝してから戦隊の解隊まで』

特設海上挺進第五十一戦隊長

吉村 勝也

〈はしがき〉

本文をお読み頂く前に、当時の背景について言及しておきます。

昭和18年に入り、大東亜戦争は益々苛烈を極め、戦局は逐次吾れに不利な方向に向かいつつある頃、ある期待を寄せながら、嚴重なる企図秘匿の下、「海上挺進戦隊」なる特殊部隊が創設され、秘密裡に訓練が始められて

いた。

二 昭和19年7月頃から9月頃にかけて船舶司令官室管理の下、第一次として、海上挺進第1戦隊から第30戦隊まで編成され、沖縄方面軍に9個戦隊、台湾方面軍に7個戦隊、フィリピン方面軍に14個戦隊が、それぞれ配属された。要員の主体は「特幹第1期生」で、緒戦においては大きな戦果を挙げたが、以後大きな犠牲を強いられたのである。

三 昭和20年4月～6月頃にかけて、本土防衛のため、第二次として、特幹2期生の一部及び3期生の大部をもって第31戦隊から第40戦隊が編成され、7月に入り、それぞれの方面軍に配属された。

四 同時期、船舶司令官は、独断にて2戦隊余計に編成し、自らの直轄戦隊として、特設第51戦隊、特設第52戦隊と命名した。

そのため、隊員はそれぞれの原隊から出向の形を取り、2期生のみをもって編成された。要員は極めて優秀であったが、舟艇、器材は員数外を寄せ集めたため、整備その他いろいろな面で苦勞が多かった。

五 第51戦隊の編成、装備の概要(基地は博多郊外・今津地区)

戦隊長以下 165名

本部・・・10名

戦闘隊・・・65名

整備隊・・・40名

勤務隊・・・50名

舟艇・・・50隻

小銃・器材・・・若干

六 任務は朝鮮海峡の防衛(大陸との補給ルート確保)

昭和20年8月15日、何か重大放送があるので、全員で聴くよう手配した。

折しも数日前、ソ連が参戦してきたので、更に一層一億一心、頑張れというような放送でもあるのかなと思っていた。そして正午頃だったか、戦隊本部の置かれている法教寺の本堂周辺に全員集まり、座して1台のラジオに食い入るように耳を傾けながら、「堪工難キヲ堪工忍ビ難キヲ忍ビ・・・」の玉音放送を聞いたのである。初めは全く理解出来なかったが、引き続いてのアナウンサーの解説によって、段々夢が覚めるように判ってきた。

「そんな馬鹿な・・・そんな阿呆な事があるう筈がない」と打ち消しながら、何とも言えぬ焦燥感、寂寞感に襲われ、呆然自失たる有様であった。

俺は戦隊長だ、しっかりせねば・・・そして適切な指示を出さねば・・・それには情報が欲しい。特設の文字のついで

た51戦隊は、広島船舶司令官の直轄の戦隊であつて、私共の上司は、佐伯文朗中将唯一人なのである。通信網の途絶えている今、上司の指示を待つ余裕はない。戦隊長自らの独断によりこの非常事態を乗り切らねばならないのである。

その頃、村の周囲の情勢は、「中国軍がすぐ上陸してくる」とのデマが飛び、一部の人達が家財をまとめて山の方へ避難をし始めた。また、近隣に航空基地があつたが、血気に逸る搭乗員が出撃したまま帰つて来ない等々の情報が入ってきた。パニック状態にはなっていないものの、人心の動揺は隠し切れず、このような間にあつて徒に造言蜚語に惑わされてはいけない、と確と心に言い聞かせながら、また、大事な戦隊員達に万一の事があつてはならないと、「吾れ今何をなすべきか」と必死であつた。一日悩み抜いた後、私は独断で左のような処置をした。

(8月16日)

一 早朝、「戦隊は只今より出撃せんとす」の非常呼集をかけたのである。ただし、舟艇の出撃準備だけで、爆装はさせなかった。

二 一方、戦隊の運命を左右する最重要時機なるをもつて、副官加藤中尉を広島船舶司令部のもとへ直接命令受領

に行かせ、その指示を待つ事にした。因みに数日後、船司からは、「戦隊はその任務を解除し、8月中旬に広島船司に帰任すべし」との命令と、その他の指示を加藤中尉が持ち帰つた。

三 また、余りにも唐突な「終戦の詔勅」は、一種の欺瞞作戦の疑いもあるので、和戦両様の構えから持久戦もあり得るとの考えで、先ず「食糧確保第一」と判断し、博多の糧秣廠へ糧秣を取りに行った。

(この判断は、吾れながら今もって快哉を叫びたい快事であつた。)

糧秣廠は、一種のパニック状態に近く、上陸を予想する敵軍に押えられてはならないと、近隣の牛馬車を利用して、疎開と称して搬出の最中であつた。丁度そこに行き合わせたので、「何でも持つて行け」との事になり、先ず米、味噌、醤油、塩、砂糖の搬出を第一とし、余裕があれば若い隊員達のため甘味品、航空チョコレート等々貰えるだけ貰つたのである。

その輸送は、当時、今津の町の浜さんという人から遊休中の中型バスを1台借り上げていたので、大変役に立つたのである。米などは第14船舶団から大発を借りて運び、その他はバスに満載して基地に向かった。

ところが、運悪く、基地の約4キロ

手前でタイヤがパンクしてしまい、全く動けなくなりました。従って、基地隊員全員で蟻の行列のように担いで運んだのである。バスはフォードの特殊サイズで、スペアタイヤが全然ない。道路脇に摺り座して動けない自動車ほど始末の悪いものはない。持ち主にお返しするまで、これ以上損傷するわけにはいかないので、暫くバスを視衛兵を立てることにした。

8月19日、20日頃と記憶するが、颯風が博多を直撃したのである。余りにも強い風雨に模合索が切れて、繫留中の舟艇が1艘沖に流れ出してしまった。幸い人は乗っていなかったが、候補生が一人飛び込んで、舟を救出に行くといい出した。私は、断固押えた。行つてはならないと。吹き募る風雨の中で、私共の命を託した舟が1艘傾きながら沖に去り、やがて視野から消えて行つた。この様子は今も眼底にはつきり焼き付いて残っている。

一方、バスの方も嵐のため、看視兵の立哨を取り止めさせた。

翌日、嵐が小康状態になってから再び看視兵が行くと、一夜にして、ダイナモ、キャブレターその他付属品が外されてしまっていた。盗賊の被害に遭って、敗戦後まだ幾日も経たないのに「人心地に落ちたるか」と複雑な心

境であった。立哨を止めさせた二日程で、他のタイヤは盗まれる、内装品は盗られるで、バスは全くの残骸を晒すのみとなつてしまった。

かくして、16日早朝、出撃命令を下してから、嵐が過ぎ去るまでの数日、次々と起こるハブニングの連続で、隊務に追われ、それぞれ疲労困憊、嵐の通過と共に、張り詰めた気持ちも段々に萎えてきたのである。

この儘では隊員の士気も阻喪してしまふ。ここで更に隊員の心を一つにし、士気を鼓舞するため、隊誌『かみしゃち』第1号を8月20日に発行したのである。引き続き21日に第2号、22日に第3号が発行され、27日発行の第5号をもつて終わっている。

この頃から、広島への帰還準備が始まり、撤収作業や、後始末作業に追われるのである。

食糧が充分確保されているので、部隊の炊事係に、今までの「ケケケチ献立」から、飼っている鶏なども処分、料理して、充分な「栄養献立」にするよう、指示したことを憶えている。

撤収に際し、船舶司令官からの指示は、次の通りであった。

一 再起に使用出来るものは、隠匿せよ。

二 秘密を要するものは、焼却せよ。

三 民需に転換出来るものは、転換せよ。

誠に荒っぽい指示で、撤収帰還するまで1週間そこそこの余裕しかない。

先ず、第二項に基づき、舟艇は解体し、船体は焼き、エンジンは浜の置場に整然と並べた。

補給部品、補修器材関係は、公団に引き渡した。

爆雷は、上級部隊の兵器部へ返還した。

糧秣、衣料については、先ず隊員優先で、何でもよいから希望に沿って支給するよう、また、背負えるだけ持たせるよう指示した。

残余の物については、借上自動車が返せなくなった浜さんに、弁償を兼ねて応分の食糧を、また、駐屯中特に世話になったお寺の人達に少しでも優先的に、その他は、公平に配分するよう指示した。

そして、林少尉以下勤務小隊を、後始末と残務処理のため残して、戦隊主力は、今津、博多の地を後にし、広島に向かったのである。

この時、被服係の小野軍曹が「隊長には何も支給してないが、何か持って行かれては」の問い掛けがあった。気を使って嬉しいうる限りである。「私は何も要らないが、敢えて言うならば、

戦隊に酒が沢山あるので、私一人では幾らも持てないから、候補生達に1本ずつ広島まで持たせてくれ」と依頼した。この酒は、私が広島宇品地区で10

月まで戦隊の残務整理をやっている間、大変役に立ったのである。然し反面、私も飲み過ぎたせいかわり、罰が当たって、復員帰宅後間もなく痔瘻で、70日間も入院するはめとなったのである。

さて、8月31日、本隊は命令通り、原爆でひん曲がったプラットホームの鉄柱の立ち並ぶ中、広島駅頭に降り立ち、帰任したのである。

ところが、船舶司令部のある宇品地区では、原爆被爆者を収容しているため、私共の受入れ兵舎がなく、特設戦隊の隊員は、それぞれ原隊から出向の形で51戦隊を編成したのであるから、「即刻、それぞれの原隊に復帰すべし」との命令が下されたのである。

広島駅頭でこの命令を聞いた私は、正に晴天の霹靂、何かの行き違いではないかと耳を疑った。

いやしくも、命を張った数カ月、特攻隊員として本土防衛の任に就かれ、直轄戦隊としての誇りを持ちながら死力を尽くし、本日幸いにも、誰一人犠牲者を出すこともなく、広島に帰任したにも拘わらず、一本の命令のみで解隊を命ずる非情さ、一片の慰労の

真珠湾突入の軍神岩佐直治大尉を偲ぶ

海兵72期 林 藤太

〔編注・平成21年3月28日(土)、高

崎市にある群馬県護国神社において、七体目の「特攻勇士之像」の奉納除幕式が執り行われた(会報『特攻』第79号掲載)が、同県特攻勇士の像建設実行委員会の一員としてご支援いただいた群馬県江田島会長代行林藤太氏から、それを機縁として、ご同期(海兵72期)や兵学校時代起居を共にされた先輩方の特攻戦没者に関する手記、特に県立前橋中学校同窓で、海兵7期先輩に当たる岩佐直治大尉(真珠湾突入戦死後二階級特進中佐)に関する貴重な手記をお寄せくださったので、その一部を掲載させていただきます。

◇ ◇ ◇
「前略にて失礼致します。

先日は、当県における「特攻勇士の像」建設について、格別なる御支援御指導を戴きお陰さまにて全国7番目の像の建設を目出たく終了することが出来ました。運営委員の一人として心から御礼申し上げます。

さて、この度は貴協会へ入会したばかりの小生が烏髭がましくも貴誌への

投稿をお送りしたご無礼をお許しく下さい。

さて、私共海軍兵学校第72期生は、昭和18年9月、625名卒業、既に、ミッドウェイ海戦大敗、山本長官戦死など、日本の敗色濃くなりつつあった時期ながら、勇躍海に空に巣立って行きました。「靖國で会おう」を合言葉に激戦地に別れて行った同期生達は、2年足らずの戦闘で、335名戦没(53・6%)、うち特攻46名(神風36名、回天7名ほか)。私共戦闘機組は、625名中、139名で、10カ月の訓練を受けてから実戦部隊に赴任、98名(70・5%)を失いました。

残念ながら小生は、内地の防空戦闘機隊として、岩国、鳴尾基地にて米機の邀撃に奮闘しましたが、奇しくも生き残りました。

思えば、昭和19年10月25日、フィリピンのマバラカット基地から出撃した関行男大尉率いる「神風特別攻撃隊敷島隊」を第1号とし、昭和20年8月15日終戦の日、九州の宇佐基地より宇垣纏長官を乗せ、彗星艦爆11機を率いて沖繩の米軍基地へ特攻出撃した中津留隊長が、最後の特攻だったろう。関、中津留兩大尉とも海兵70期で同期、小生よりも2期先輩で、兵学校時代起居を共にし、中津留大尉と同行の隊員の

中に1期後輩の伊東幸彦中尉もいたと知り、ただただ冥福を祈るのみの昨今です。……

なお、前会長の瀬島隆三氏と水島総氏による「21世紀への遺産：神風特別攻撃秘話：この映画を祖国日本のために散華した多くの若き御霊に捧げる」が製作費などの理由で、幻のシナリオとなってしまったと聞き、残念に思っている一人です。

平成21年6月15日 林 藤太

◇ ◇ ◇
「ニイタカヤマノボレ1208」

昭和16年12月8日、山本連合艦隊司令長官から発せられた暗号電報であった。それより六十数年、正に今昔の感ひとしおである。

第二次大戦劈頭、真珠湾に散った岩佐先輩を偲び、平成3年12月8日、前橋の菩提寺において、群馬県の江田島出身者による五十回忌慰霊祭を開催した。



昭和16年9月 出撃前の岩佐大尉(当時)

当日は、岩佐中佐らと同行し、奇跡的に唯一人生き残った酒巻和男氏(海兵68期)を始め、全国より円深き方々の参集を戴いた。その席上、岩佐中佐と同期(65期)の菅昌氏の手記が奉読された。

同氏のお許しを得て茲に掲載する。

「真珠湾突入」

伊22潜航海長

菅昌徹昭海軍大尉 手記

特別攻撃隊5隻の潜水艦は、11月18日朝呉を出港、倉橋島で特潜を搭載、日没後から順次ハワイに向け出撃した。伊22潜はジャイロコンパスの調子が悪く、その交換に手間取って、19日の〇三〇〇(午前3時)やっと錨を上げた。出撃が遅れたため、豊後水道で北上中の連合艦隊旗艦長門と行き交い、直接山本長官から手旗信号で激励を受ける幸運に恵まれた。特潜攻撃を数度の具申で許された岩佐の感激は一人であったらう。

出撃からハワイまでの20日間彼の態度は常に平静の一語に尽きた。

敵の航空基地の600哩(1哩は1852米)圏内は、昼間潜航、夜間水上航行で進撃したが、日没後浮上すると、彼は率先特潜の検査補修にかか

り毎日数時間、時には徹夜して整備に力を注いだ。潜航中は、松尾敬宇中尉（海兵66期、シドニー特攻）を相手に真珠湾の海図を広げて侵入計画を練るか、特潜の整備記録の整理か、あるいは暇な軍医長との雑談くらいで、ひっそりと目立たないように振る舞っていた。

12月7日昼食時、士官室で細やかな

壮行会が開かれた。岩佐、佐々木（同乗の下士官）の二人は共に平素と変わることもなく、大いに食べ、今までの苦労話等大いに談笑していた。その後私は司令塔に上がったが、最後に八丈島を遠望してから17日間4000哩、果たして真珠湾外にきているのか不安で落ち着かなかった。岩佐は流石に大悟徹底、暫く荷物の整理などしてベッドに入り、言われた時間に起こしに行つた。徒兵は、余りによく眠っているの起こしかねたということである。

彼はアルコールで体を拭き、下着等全部新品に着替えて香水を振り、真新しく搭乗服に身仕度をし、艦内神社に参拝、嘗水雷長（下士官）が立てた抹茶を静かに啜り終わった後、筆を執つて「至誠」と書き残した。そして発令所から拡声器で、艦内一般に感謝と決意のほどを淡々とした声で挨拶をし、浮上を待った。

日没後45分浮上、オアフ島西端の

バーバースポイントの灯台の閃光、続いて湾口東側ダイヤモンドヘッドの灯光が見えてきた。間違いなく真珠湾口に来了。私は司令塔に下りて艦位を入れ始めた。その時、岩佐が発令所から上がった来た。「行くぞ」と言つて、手を差し出し、私は黙つて手を出し、握り返した。

艦橋に出て現在位置や著名な目標を説明した後、会敵を予想し、いつでも潜航できるように、岩佐、佐々木の二人は皆と握手をしながら後甲板に下りて乗艇した。艇はそのまま水上航走し、発進予定地点に着いて漂泊した。その時、連合艦隊への勅語と長官の訓辞が届いたので艇内へは電話で伝えた。

発進までには充分時間の余裕もあり、四囲の状況は極めて平穩で、陸上は灯火管制もなく、哨戒の飛行機も艦艇も全然見えないので、艦長は艇内の二人をもう一度艦橋に呼び戻された。ここまで来ると、湾口の赤青の灯標やその光の導標まで手に取るように見えた。私は、煙草に火を付けて渡した。彼は旨そうに口にくわえ、皆の説明に頷いていた。およそ30分くらいか、いよいよ発進の時刻が迫り、二人は再び皆と握手を交わし、落ち着いた足取りで艇に帰り、静かに艇蓋を閉めた。これが岩佐の見納めであった。

艦は潜航した。艦長の「艇発進用意」の号令に「艇異常なし、発進用意よし」の岩佐の報告、艦長、続いて司令が最後の激励の言葉を贈り、電話器が私に渡された。「何か言っておく事はないか」と尋ねると、「別に何も無い、後は願います」との返事。「では電話切るぞ」と言うと、「帝国の万歳を祈つて出ていくぞ」の言葉を最後に電話線は切られた。艦長の「発進！」の号令で固縛バンドが解け、小さなスクリュー音と共に艇は真珠湾に向け母潜を離れて行つた。

時に12月7日二〇四六（午後8時46分）、湾口の171度9分。（以上）

◇ ◇ ◇

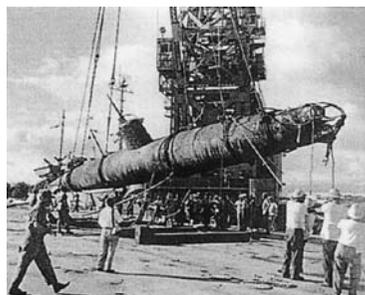
〈あとがき〉

林 藤太（海軍兵学校72期）
私事で恐縮ですが、岩佐直治氏とは前橋市立城南小学校、群馬県立前橋中学校共同窓で、海軍兵学校は7期先輩、実家が隣町、中佐の兄竹松氏と小生の兄が親友、古くから家同士家族ぐるみの昵懇の間柄だった。

岩佐中佐が帰省された時は、わざわざ小生在学中の兵学校まで手紙や母からのお守りや土産物を届けてくれたり、家族からの伝言などを伝えてくれたりした。

昭和16年9月のある日、小生が3号生徒（1年生）の時、課業の合間だったか昼休みだったか。当直監事室に来るよう伝言があり、急いで駆け付けたら、立ち話している岩佐大尉（当時）の姿があった。「先日帰省した時、貴様の実家へ寄つたら皆元氣だったよ。今特殊任務に就いているので、すぐ帰らなければならぬ。元氣でやれよ」と言われて出て行く姿をじつと見送った。

その3カ月後、12月8日の開戦劈頭真珠湾の特別攻撃で散華されたのである。あの面会の時の「特殊任務」が、この壮挙にあつたのかと思ひ当たつた時、私は17歳の若き胸に、言い知れぬ熱き思いを感じたのである。武者震いと共に一刻も早く先輩に続けと肝に銘じたのである。（おわり）



戦後真珠湾の海底から引き揚げられた特殊潜航艇（甲標的）

陸軍挺進部隊銘々伝⑤続 新海希典少佐

田中 賢一

挺進飛行戦隊中隊長新海希典大尉については前号で述べた。その間、訓練振りについては名を残したが、武運には恵まれなかった。この人の戦い振りが戦史に足跡を残すのは、挺進部隊を去ってからである。従って、挺進部隊銘々伝の標題は内容に副わないが、私が接したのは挺進飛行隊当時だけなので、敢えてこの標題の下で、2回ばかり記述する。

第2独立飛行隊長新海少佐

昭和19年7月米軍はサイパンを手中に取るや、アスリート飛行場を拡張整備し、戦略空軍の主力をここに移し、日本全土に対する爆撃態勢を整えた。このことを予期していたので、7月20日参謀総長指示をもって陸軍航空総監に対し、少数機で洋上1200キロの航程を飛翔し、敵飛行場に在る敵機に対し、夕弾による必殺攻撃に任ずる部隊3個隊の編成を命じた。

航空総監は19年8月8日、教導航空軍司令官となったが、総長指示に基づき、下志津、鉦田両教導飛行師団に、

司偵各1隊を、浜松教導飛行師団に重爆1隊の編成を命じた。なお、これらの司偵は夕弾を搭載できるように改修された。

浜松教導飛行師団では、当時教官として勤務していた新海少佐を隊長とし、隊員は乙種学生の課程を終え教官要員として師団に留まっていた56期生を主体として編成した。各機共搭乗員は正副操縦者、航法兼爆撃、通信、機関、射手2となっていた。

訓練は編成とともに開始された。その主体は洋上1200キロの航法だった。連日薄暮に離陸し、編隊で夜間洋上を航進する訓練が、約40日間にわたって行われた。コースは浜松から南は九州大隅半島佐多岬、又は種子島、北は北海道日高の襟裳岬、根室の納沙布岬に及んだ。主としてこれらのコースで洋上推測航法の猛訓練をやり、翌払暁帰還するのが日課だった。訓練範囲は沖縄、鳥島、朝鮮半島と次第に拡大された。浜松では日没後出て朝帰るこの部隊を夜鷹部隊と呼ぶようになった。時には照空隊との連合演習も行った。敵の基地から照射された場合に備え、浜松の高射砲部隊に照射してもらい、それを超低空で離脱する訓練も行った。飛行機の整備で飛行訓練を行わないときは室内で図上訓練を行っ

た。全く不眠不休だったという。挺進飛行戦隊当時を知る私は想像出来る。下志津と鉦田の部隊でどんな訓練を行ったか記録がないので判らないが、これほど徹底した訓練は出来なかったと思う。

11月1日、B-29 1機が関東地区に偵察に飛来したが、我が方も1度この日にサイパンの偵察を行った。下志津師団の百式司偵1機は往復とも硫黄

島で給油し、サイパンのアスリート飛行場を高度8000で写真偵察した。多数のB-29が在ることが判明した。**第2独立飛行隊の第1回攻撃**
10月28日大本営は、教導航空軍にサイパン基地攻撃を命じた。航空軍では

11月3日に第1回の攻撃を行う計画だったが、海軍が2日に中攻部隊で攻撃する計画と知り、陸軍も1日早めて攻撃することとした。

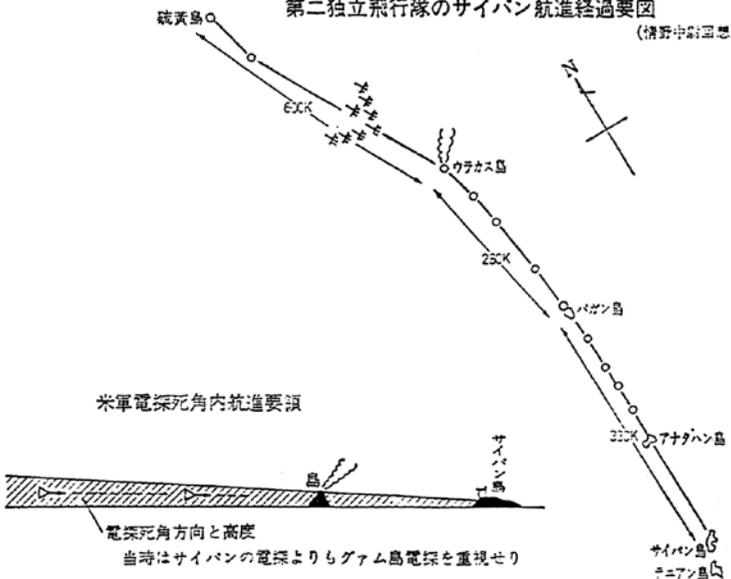
第2独立飛行隊の

隊長新海少佐以下九七重二型9機は、11月2日一二二〇浜松飛行場を離陸し、編隊で硫黄島に向かった。天気は晴朗で快適な飛行だった。4時間半の飛行で一六五〇硫黄島に到着した。直ちに燃料補給と爆装を終わり、乗員は機側で小憩をとった。

故障機1機を残し8機編隊で一九五〇離陸し一路サイパンに向かった。まず活火山で明瞭なウラカス島に向かい、これ

第二独立飛行隊のサイパン航進経過要図

(清野中尉図意)



米軍電探死角内航進要図

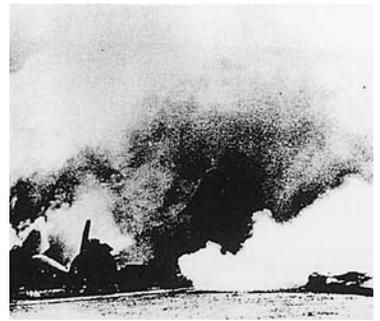
電探死角方向と高度
当時はサイパンの電探よりもガム島電探を重視せり



これはテナンの写真であるがサイパンも同様であったと思う。

から島伝いにアナタハン—サイパンのコースを進んだ。1機は中途から引き返し7機となった。航進高度は出発後暫くは2000〜2500米で飛んだが、次第に高度を下げつつ、ウラカス島までは500米、以後は更に下げ、敵の電波警戒機の死角を利用するため、終わりの頃は40〜50米の超低空で航進した。

血のにじむような訓練が実を結び、超低空接敵は成功し、アスリート飛行場は煌々として不夜城さながらだった。B-29の銀翼がギッシリと並んでおり、トラックがライトをつけて走り廻っていた。



米軍の写真 翌朝まで燃えていたのか

突撃コースに入るや突撃の無電が発せられ、各機は夕弾を投下、機上の機関砲、機関銃も射弾を浴びせた。離脱して振り返れば飛行場は爆煙に包まれて大きな火柱が上がっていた。新海隊長は攻撃成功を基地に無電で告げ帰途に就いた。硫黄島に帰着した時は既に夜が明けていた。攻撃隊8機のうち5機が帰ってこない。隊長は本土方面の天候悪化を気遣い、2機を浜松に帰し、単機で残り僚機の帰還を待ったが午後になっても帰らなかつた。海軍側の通報によれば、2機は自爆、1機はバガン島に不時着、2機は不明だった。

本土方面の天候は益々悪化したので、新海隊長は航法に自信があるので、3日一五三〇硫黄島を離陸し帰途に就いた。飛べども飛べども白雲の層で切れ目はない。航測により遠州灘上空と判ったが、雲が垂れ込め浜松は見えない。

い。対空無線から「九州晴れ、宮崎に着陸せよ」と知らせてきたが、九州までの燃料はない。旋回して雲の切れ目を探した。雲上の陽は沈み月が出ている。やがて燃料標示灯の赤ランプが点じられ、暫く飛ぶと雲の切れ目からキラキラ光る波が見えた。新海隊長自ら操縦桿を執り急降下し雲の下に出た。地点標定と航測により土佐湾にいることが判った。浜松からの地上連絡により高知の海軍基地に夜間着陸設備が依頼された。赤ランプが点灯してから既に25分経っている。エンジンは快調だが、燃料はいつ切れるか判らない。辛うじて高知飛行場に着陸できたが、地上滑走中にエンジンは停止した。真に危機一髪だった。

なお、第4独立飛行隊は、2独飛の2機を併せ同日出撃することになっていった。重装備で離陸滑走距離が伸びるため、柏飛行場を使うことになっていった。ところが、急なことで整備が間に合わずに、2機しか出撃できず、それも硫黄島が発見できずに引き返すという始末だった。どんな訓練をしていたのか。

2 独飛の第2回、第3回の攻撃

11月6日、今度は5機で硫黄島まで進出したが、不調の機もあり2機で攻撃に向かった。アスリート飛行場はこ

の時も灯火管制は行われておらず、我方は落ち着いて攻撃できたが、猛烈な対空砲火を浴びた。しかし致命的な被弾はなく全機硫黄島に帰着した。11月26日3機をもって第3回目の攻撃を行い、今回も無事帰還した。搭乗員の見たところでは、12機以上撃破、3箇所の大火災を発生させたという。

新海部隊の感状と単独拝謁

12月27日防衛総司令官から次の感状が授与された。

感状

第二独立飛行隊

右八隊長陸軍少佐新海希典指揮ノ下ニ「マリアナ」方面敵航空基地攻撃ノ任ヲ受クルヤ周到ナル準備ヲ整ヘ凡ユル困難ヲ克服シ戦法ニ創意工夫ヲ廻ラシ烈々タル気魄ヲ以テ克ク数次ニ亘リ夜間長遠ナル渡洋進航ヲ敢行シ「サイパン」島ニ於ケル敵B-29ノ基地ヲ急襲シテ多大ノ戦果ヲ収メ皇土防衛上至大ナル貢献ヲ致セリ 斯クノ如キ八隊長以下決死挺身皇軍重爆隊ノ真髓ヲ遺憾ナク發揮セルモノニシテ其ノ武功拔群ナリト認ム

依ツテ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十九年十二月二十七日

防衛総司令官 稔彦王

この感状は上聞に達し、昭和20年2月23日には単独拝謁の榮に浴した。

義烈空挺隊不時着生き残り
熊倉順策君の逝去にあたり
思うこと—サイパンの潜入諜
者を志願した人達—

田中 賢一

義烈空挺隊には中野学校出身の将校8名、下士官2名がいた。そのうち熊倉君以外の9名は、沖繩作戦で戦死してしまった。熊倉君だけは搭乗機が故障し不時着したので生き永らえていた。

途中で、故障や航法未熟のため目標に到達できず、不時着したのは4機ある。私は義烈に関する単行本や特攻会報の記事を書くため、不時着生き残りの人、数名に会い、資料を求めた。この度、熊倉君の逝去によりこれらの人はすべて鬼籍に入ってしまった。

平成21年2月27日、熊倉君の訃報に接し、葬儀には参列できなかったが、弔辞を送った。その末尾に、

特攻の語り部たりし希有の人
今まかりて世はながれゆく

あれから60余年、年はまさに流水の如しである。この機会に中野学校出身の義烈空挺隊員について、書き留めておくことにする。出所はすべて熊倉君である。

陸軍中野学校

昭和15年11月末、陸軍中野学校二俣分校では、分校開設以来初めての卒業式が行われた。卒業する学生は丙種学生200名。丙種学生とは、幹部候補生出身の見習士官で予備役士官となるものである。予備士官学校の成績優秀者で、諜報要員としての適性のある者を選抜し中野学校で教育した。

ここでは諜報活動やゲリラ戦に必要なことを教えたが、技術的なこともさることながら、最も重視したのは精神の陶冶だった。一人になっても、誰も見ていなくとも、最後まで戦い、名も残さず死んでゆける国士を養成するの

が、この学校の狙いだった。さて、卒業する学生は、それぞれ各方面軍司令部付として発令されたが、6名だけは大本営陸軍部付という命令をもらった。

その6名とは、阿部、梶原、棟方、渡辺、原田、熊倉の各見習士官であった。数日前に「サイパン行きを志望する者はいないか」と言われた時、真っ先に手を挙げた人々である。

「名もなく死んでくれ」

赴任先ごとに分かれて申告した時、分校長熊川中佐は、この6名のグループの一人一人の手を握り、感慨を込めて言った。思えば僅か3カ月ばかり

だったが、ここでの日々は、教官、同僚との魂の触れ合いだった。

通信、暗号、爆破、棲息法といった技術については、それぞれ専門の教官が教えたが、精神については口舌で教えるべきことではない。誰も見ていない所で、自ら判断し、一人で決心し、危険極まりない環境の下で行動しなければならぬ。どんな所で、何をしたら死んだか、確認してくれる人はいない。それが諜者なのだ。お国の為に死んだという名誉さえ与えられないことすらある。

殉国の至誠がなければならぬ。教官、学生相携えて、この行動の原理を探し求めていった。

かくして卒業した6名は、大本営に出頭した。

大本営にて

東京市ケ谷の大本営に到着すると、中野学校本校から同時に発令された、辻岡、石山の両少尉が待っていて総勢8名となった。辻岡と石山は二俣組の1年先輩である。

一同は、参謀総長梅津大将に申告した。通常、少尉や見習士官が着任しても参謀総長にまでは申告しない。ところが今回は違う。梅津参謀総長は参謀次長秦中将、第二部長有末少将始め担当の参謀を引き具し、一同の前に進み

出て、「オオ、お前たちが行ってくれのか、そうか、そうか」と慈父のような眼差しで一同を見た。

申告が済んだ後、一同は昼食を共にした。この席上でも参謀総長は、一人一人に家庭の状況を尋ね、優しく語りながら聞き、「九州から部隊が来るまで郷里に帰ってきなさい」先祖の墓にと、菊花一輪ずつを与え、傍らに控えている参謀に「見習士官は特例をもって早く任官出来るよう、陸軍省と交渉せよ」と命じた。鶴の一声、翌日は全員少尉となった。

ところで、サイパンには如何にして行くのか、担当参謀の説明で、空挺特攻部隊に所属して行くことを知るに至った。

その後、中野学校から通信専門の下士官2名が加わり、計10名となった。

奥山隊の一員となる

やがて、奥山隊が豊岡（現在の入間基地）に来てしていると聞いて出頭した。こんな逞しい兵隊が日本にいたのかと、10名は驚きの目を見張った。体つきが二俣分校で見慣れた軍人より一きわ大きく、如何にも鍛え上げたという感じがする。その代表が奥山隊長だった。

「貴様ら何が出来るのだ」「何も大したこと出来ません」辻岡少尉が代表

して答えると、「そうか、忍術でも使えると思ったがだめか。ハッハッハ」大声で笑う。傍らに控えていた渡部大尉が、これまた大口を開けて笑う。まさに天真爛漫。自ら国士をもって任じていても、忍者は忍者。どこかに翳りがある。それに引き替え、落下傘兵の方は秋晴れの空を仰ぐが如く、爽やかである。歴史小説に出て来る伊賀や甲賀の忍者と木下藤吉郎ほどの違いがある。特攻隊という悲壮感が、全く見受けられぬ。

「名もなく死ぬ」という中野学校独特の死生観を抱いて、ここに来てみたが、落下傘兵の方は、そんな難しいことは少しも考えていないらしい。「早く当隊の一員になれ」と奥山隊長は言う。俺達は一般の軍人とは違う。知恵を武器として戦うのだ、という自負心を持ってはいたが、そんなものは一遍に吹き飛んでしまった。「謀略は誠なり」二俣分校で、ある教官が言った言葉を思い出す。

「奥山隊と一緒にB-29の爆破をやつて、それから諜報員の仕事に移ります」と辻岡少尉が言うのと、奥山は、「それは後で決めよう。それよりも貴様らも奥山隊の一員であることを忘れるな」かくして直ぐに訓練に入った。

以下は熊倉君の話したことを成文化

したものである。

中野組も落下傘兵と一体になってB-29の爆破訓練に精魂を傾け、入神の域に達したが、第三独立飛行隊の訓練が手間取り、硫黄島中継が出来なくなりサイパン特攻は取り止めになってしまった。もしサイパン着陸が実現していたら潜入課者はどんな活躍をしたであろうか。

義烈空挺隊は沖繩作戦に使われるまで、5カ月近く特攻隊として存在したのであるが、その間中野組を奥山隊から除外するという話は、どこからも出なかったし、この人達がそのような思ったことは聞かなかった。それには奥山隊長の指揮官としての絶大な魅力があったためと思う。

熊倉君が奥山隊長について平成10年に書いた一文がある。

最も強く印象に残っている人といえば、それは何といつても奥山隊長です。陸士53期でしたから、あのとき26歳になるかならない年齢だったでしょう。

私は今75歳、どこをとつても、当時のあの人に及ぶところはありません。私に及ばぬどころか、現在日本の各界の指導者だって、信念、責任感、度量、統率力、何をとつても到底奥山隊長さんには及ばぬと思います。奥山さんは日本の落下傘部隊創設の初めからお

れたそうで、昭和16年挺進第一聯隊が編成されたとき、その中隊の先任將校で、その後中隊長になられたと聞いております。小隊長や古参下士官など、早くからこの中隊にいた人達ですから、心の底から奥山隊長に心服していました。従つて何も言わなくても、部下はついて行くという気風でした。

私達のように経歴が違い、しかも後から入つてきて軍隊経験も乏しい者に対しても、何の分け隔てもなく、以前の部下と同じように取り扱つてくれました。包容力があるということでしょう。そのような隊長でも悩みはあつたと思います。意気込んでサイパン攻撃を準備したものの、飛行隊の練成が間に合わない、そのうちに硫黄島中継が不能になる。硫黄島なんか使わないで直路サイパンまで行ける飛行機はないものか、B-29は往復してはいるではないか、我々は片道でよいのだ。こんなことを将校室で夜遅くまで話し合うことがしばしばありました。そんなときに隊長がよく言った言葉は「何をよくよ川端柳」、これは度々聞いた言葉でした。我々に対して言うのではなくて、自分自身の悩みを打ち消す為に言っていたのだらうと思います。

浜松に移つてから、明日は出撃だと準備、その晩は特攻食といつて大そう

御馳走が出ました。翌日になると硫黄島が空襲を受け滑走路が使えないので延期ということが何日か続きました。その頃下士官の間で、義烈空挺隊をもじつて「愚劣食い放題」という言葉がはやりました。それを聞いた隊長は、「ぐれつくいほうだいはうまいこと言つたもんだ」と笑いましたが、そこ

には一抹の淋しさがあつたのでしよう。私共もその頃の状況に翻弄されていたのですが、今考えると豪放磊落な隊長も、うまいことを言うもんだと笑つた裡に、深い悩みがあつたのだらうと思います。私と同じ機に乗つて生き残つた和田曹長の話では、ある寒い日に隊長室に何かの用事が入つて行つたら、隊長は底冷えのする部屋の中で、窓際に置いてある金魚鉢を見詰めており、「当番室に湯が沸いていたら持つてきてくれ」と言われたそうです。お茶ですかと問うと「湯だ、この金魚も寒かろう。湯を入れてやる」と言われた。そこには何か深い悩みがありました。百三十数名の命を預かっていて、なかなか決行できない統率上の悩みは大きかったのでしょうか。

サイパン攻撃が取り止めになつて、それから再転して、いよいよ沖繩攻撃となるのですが、特攻協会作成のビデオ



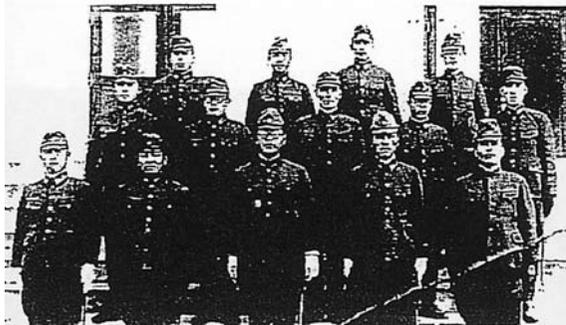
奥山隊長

オには、健軍出撃時のニュース映画が取り入れられており、奥山隊長の肉声を聞くことができます。出撃時の訓示で「待望の日は遂に到来した・・・」と言っておられます。我々もそうでしたが、待望の日という一言の中に、隊長の深い思いが籠もっています。ビデオのこの場面、私は何度見ても感慨新たなものがありません。

まだまだ奥山隊長の思い出は尽きないのですが、私の生涯脳裏に焼きついて消えない人物像です。

奥山隊長が示した「攻撃訓」

- 一つ一斉澆刺と
- 二つ任務絶対 俺がやる
- 三つ三人三世ぞ 戦友ぞ
- 四つよく見よ敵を 準備を早く
- 五つ剛胆沈着 腹を据え
- 六つ無駄弾打つな 大事な弾ぞ
- 七つ七生報国 早まるな
- 八つ早くしっかり 装着点火
- 九つここが墓場ぞ しおどきぞ
- 十で尊き任務ぞ あくまで頑張れ



中段向かつて右から渡辺、石山、1人おき、辻岡、梶原。後段右から棟方、原田、熊倉、阿部。前列は当初からの奥山隊

この記事を沖縄の飛行場に突入し戦死した中野学校出身の英霊に捧ぐ。

(階級は出撃時のもの)

- | | | |
|----|----|----|
| 少尉 | 辻岡 | 創 |
| 〃 | 石山 | 俊雄 |
| 〃 | 梶原 | 哲己 |
| 〃 | 渡辺 | 裕輔 |
| 〃 | 原田 | 宣章 |
| 〃 | 棟方 | 哲三 |
| 〃 | 阿部 | 忠秋 |
| 軍曹 | 菅原 | 俊蔵 |
| 〃 | 酒井 | 武行 |

九名の英霊の遺墨

生中無生 死中有生

昭和二十年元旦

陸軍少尉 辻岡 創

同志

元旦 陸軍少尉

石山 俊雄

魁を梅ぞ此の身は
散るゆゑわ

後に續かん櫻花哉

梶原少尉

一信心通

菅野 栄哉

天皇の皇祚護
永く道は

永く各道は

何朽き

原田少尉

かすくめ

乙山に咲きし若櫻

君が清為に

散るやういしき

渡辺少尉

散りく散るな

バト散れバトぬ

阿部少尉

君が代はちよらぶよと

いと春も

白ひ忘る若ぶら花

棟方少尉

通信の生

酒井 栄哉

殉國沖繩學徒顯彰六拾四年祭

平成21年6月23日(火) 15時15分から靖國神社において「殉國沖繩學徒顯彰六拾四年祭」が厳肅に斎行された。元国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉國沖繩學徒顯彰會」の主催によるものである。

6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖繩県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が、麻生首相、河野衆院議長、江田参院議長、仲井真弘多知事、遺族ら約4500人が参列して盛大に執り行われた。仲井真知事は、平和宣言の中で「沖繩には広大な米軍基地が集中し、そこから派生する事件・事故が後を絶たない。今でも地中に残る不発弾に県民は危険にさらされ、不安を感じている」と述べた。麻生首相は「戦後64年を経た沖繩の地に、未だ多くの不発弾が埋没していることを心に刻まなければならぬ」と、県と連携して処理に取り組む姿勢を強調した。

平和祈念公園内の「平和の礎」に刻まれた全戦没者の刻銘は、今年新たに123柱が追加されて総数24万856柱に達した。この数は、沖繩本島における陸海軍の戦死者及び沖繩作戦中の

特攻戦死者、一般住民の戦没者も含めた数になるが、マスコミが報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例がほとんどである。

今日、沖繩戦は、多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあつて、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

戦後64年を経た今日なお現地沖繩の人々の心には強烈な思いが染み込んでおり、この日現地の慰霊追悼行事は、摩文仁だけではなく、各地の慰霊碑、就中、各従軍学徒の碑でも行われているが、中央における沖繩戦戦没者慰霊行事が、唯一、靖國神社における本顕彰祭であるのは、些か寂しい思いがする。ましてや、マスコミがこれを報道することも無い。

沖繩戦は、正に軍官民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月、3個師1旅のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して

「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に投入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となつて軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学校、同工業・農林・水産、市立商業学校、私立開南中学校の9校から1660余名が「鉄血勤皇隊」に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で見られたが、5月中旬首里城の急を救おうとして「学徒斬り込み隊」が志願編成され、50余名が一体となつて敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範学校女子部と県立第一高等女学校を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その他、県立第二

高等女学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳高等女学校の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数

約550名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴つたが、中でも6月18日には、陸軍病院は解散となり、女学生の動員も解除されたので、伊原の洞窟にあつた第三外科病院では、女学生が従軍服を脱いで学生服に着替え、解散式を済ませた瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加えられ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙にうら若き女学生27名の命が奪われた悲劇もあつた。その他戦死した女学生の数は動員数の45%250余名を数えた。男子部の44%と共に動員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

本顕彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰霊顯彰祭を斎行して今年第52回目を迎えた。遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しているが、それでも約60名の参列者のうち、約3分の1程の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、獻饌の儀、齋主祝詞奏上と進み、祭文奏上となつたが、この度は、千葉大学教育学部2年生国弘大資君が次のような立派な祭文を奏上し、改めて慰霊顯彰と伝統継承の決意を述べた。



戦の庭に赴きし在りし日の乙女たち

〔祭文〕本日、ここ靖國の御社におきまして、「殉國沖繩學徒顯彰六拾四年祭」を執り行いますに当たり、参列者を代表致しまして、謹んで御霊の御前に祭文を奏上申し上げます。

64年前になります昭和20年6月23日を顧みますと、祖国日本防衛のため、真に壯絶極まる国内最後の地上戦が行われた沖繩の地において、誇り高く祖国のため尊き命を捧げられた英霊の方々のお姿が偲ばれてまいります。

当時、米軍が占領に2、3週間を見込み、圧倒的な戦力を投入する中、実に3カ月もの間、沖繩の地を死守されました。この多くの方々が命を捧げられた沖繩の戦いが日本を守り、また、現代日本に生きる我々の命をも守り給うたことに対し、感謝の誠を捧げ、こ

の戦いの真の姿を後世に伝えていかなければならないものと存じます。

この、3カ月もの死闘は、日本全土の軍人の方々に構成された沖繩守備隊、島田叡知事をはじめとする沖繩県職員の方々、そして、沖繩県民の方々が命を捧げられた、軍、官、民一体の戦いでありました。その中にありまして、私よりも若い多くの御霊が尊き命を捧げられました。中学校の諸先輩方は、鉄血勤皇隊、及び軍に配属された下級生は、通信隊を編成され、陸軍二等兵となり、壯絶なる地上戦闘において、或る生徒は、雄叫びを上げながら敵戦車に突入し、また、或る生徒は斬込み隊員となり、そして、下級生の通信隊員は通信・伝令等の任務に邁進し、遂に、その殆どが、鬼神も哭く壮烈な最期を遂げたのであります。また、女子学校の諸先輩方は、従軍看護婦として、陸軍軍属となり、祖国防衛のため、戦地に赴き、多くの方々に無私の献身を捧げられました。

その尊き学校名は、鉄血勤皇隊、並びに通信隊となった沖繩師範学校男子部（中略）以下の9校と、従軍看護婦となった沖繩師範学校女子部（ひめゆり学徒隊）（中略）以下の7校であります。

私は、沖繩での戦いについて学ばせ

ていただく中で、学徒の方々が本当に壯絶な戦いの中で、祖国日本をお守りするため誇り高く命を捧げられたお姿を後世に伝えていきたいと思ひました。長嶺保命は御遺書の中で「皇國のために散ることは日本男子としての本望であります。死ぬまで頑張ります」と述べられています。日本人として郷土沖繩に殉じ、自ら命を捧げられるお姿に感動しました。また、尊き命をもつて、祖国に誠を捧げた学徒の方々に感謝の誠を捧げなければならぬと強く思いました。

先日、私は学友と共に、沖繩についての学びを深めるために、沖繩県に行つて戦跡に足を運ばせていただきました。健児の塔に巡拝させていただきました折に、慰霊碑近くの壕跡に入りました。当時、本当に壯絶な戦いを練り広げられた学徒の方々のお姿が偲ばれました。その他、ひめゆりの塔、梯子の塔など順肺させていただきました。

これらの慰霊碑は金城和信先生をはじめとする、戦いの直後、「英霊とともに生きる」という思いの下、命懸けで建立されたにも関わらず、新しい慰霊碑の影にひっそりと置かれていて、近くには、歪められた歴史観の下につくられた平和記念館と称する建物がありました。このような状態で、慰

霊碑を訪れる方に、金城先生をはじめとする方々の慰霊碑建立の思いということ、本当に伝わっているのだろうかという非常なる疑問が湧かざるを得ませんでした。そして、沖繩戦の真の姿は歪められ、このような学徒の方々の御遺志が正しく伝わっていない現状に強く憤りを覚えました。

私は、学徒の方々が尊き命を捧げ、守られた日本に生きる日本人として、まずは周りの学友から真の学徒のお姿を伝えていきます。そして、真の学徒の方々のお姿を後世に語り継いでいくことをここにお願い申し上げます。

願わくは、護國の御霊たちよ、天翔り、国翔りつつ、我が進むべき道よりお願い申し上げます、参列者一同、心

平成21年6月23日
千葉大学教育学部2年 国弘大資
次いで、献楽として、「海ゆかば」の独唱、奉納吟「嗚呼 沖繩戦の学徒隊」の和歌の吟詠、ゆには合唱団による「沖繩県立第一中学校校歌」「沖繩師範学校女子部・沖繩県立第一高等女学校校歌」「故郷」の歌が奉納され、最後は「海ゆかば」の吹奏裡に参列者一同昇殿参拝をして、無事祭典を終了することができた。
(飯田正能記)

「沖縄慰霊の日」に思う

田中 賢一

6月23日は沖縄戦で牛島軍司令官が自決し、我が軍の組織的戦闘が終わった日である。戦後この日を沖縄慰霊の日とし、例年現地では摩文仁の平和祈念公園で、県主催の「沖縄全戦没者追悼式」が行われている。

今年の式典は現地の新聞によれば、5千人が参集したという。中央からは麻生首相、衆参両院議長等が参列している。

主催者である県知事の「平和宣言要旨」として、現地の新聞は次の通り伝えている。

「私たちの愛する郷土沖縄は、先の大戦で史上まれにみる苛烈を極めた地上戦の場となり、20万人余りの尊い命と貴重な文化遺産や美しい自然が失われた。この悲惨な体験から戦争の愚かさの尊さ、平和の大切さという教訓を学んだ。しかし、戦後64年を経たにもかかわらず、依然として沖縄には広大な米軍基地が集中し、事件・事故は後を絶たず、地中に残る不発弾に県民は危険にさらされている。基地の整理縮小や日米地位協定の見直しを今後も訴えらるとともに、不発弾の早期処理にも

取り組む。過去の教訓を生かし、平和な未来を築いていくことが県民に課せられた大きな責務であり使命である。

平和を希求してやまない『沖縄のこころ』を礎に、世界の恒久平和の確立を目指し、県民の英知と強い思いを結集し、全力で邁進することを宣言する」

この新聞に載っている知事の平和宣言を読んで、不思議に思うことが2点ある。その一つは、沖縄県民が戦争を

発起することなど金輪際あり得ない。にも拘わらず世界の恒久平和の確立を目指し邁進すると言っている。これは知事が付けた標題ではないとしても非戦の誓いと大きく書いてある。平和は願っただけで来るものではない。念仏を唱えれば浄土に行けるのとは訳が違う。

次は、平和を脅かすものは国外にあるのだが、それについては一言も触れていない。慰霊とは関係ないことだと言うかも知れないが、我々が希求してやまない平和を犯すものは、北朝鮮の核実験でありミサイル発射である。また軍事費が世界第2位となった中国は、沖縄県の尖閣諸島を乗っ取るうとしていて、東支那海のガス田開発も、軍事力を背景に着々と進めている。この海域の彼我境界線は領土の中間線と我々は心得ているが、彼は大陸棚は領海と主張している。そ

んなことが罷り通れば沖縄の間近まで彼の領海となってしまう。

知事ともあろう者がそれを知らない筈はないが、平和を祈念するならば、国家的見地に立ち、それを求める方策を考えなければならぬ。それまで言うべしとはしないが、沖縄にある米軍基地の整理縮小を求めることは、外から迫る非平和勢力にどう対処しようとするのか。知事の平和宣言についての

批判はこれまでとし、麻生首相の挨拶について一言する。その前に昨年は福田首相が出席し、沖縄戦では20万人もの方々の命が奪われた・・・と。その中には特攻戦死者や従軍学徒の戦死者もいるにも拘わらず、命を奪われたとは無礼千万な言い方だった。

今般の麻生首相の挨拶では「沖縄は国内最大の地上戦の場となり、20万人の尊い命が失われた。県民の尽くし難い苦難を思えば、胸に迫り来る悲痛の念を禁じ得ない」と述べた。今年1月に糸満で不発弾が爆発し怪我人が出たので、不発弾対策を着実に推進する、とも述べた。不発弾は沖縄には多数あるものと思う。激しい空襲を受けた東京にも少なくない。それらは東京都として処理している。いちいち国が対処しているわけではない。沖縄の不発弾処理は国の責任の如く言うのは腑に落

ちない。

○島田毅知事追悼譜

島田毅は沖縄戦が行われた時の県知事で、昭和20年7月に自決した。戦後長く「島守の神」として尊崇を受けている。前任知事泉守紀は、沖縄戦を見越して出張名目で離県し帰任しなかった。当時の制度では地方長官は政府が任命することになっていた。大阪府内政部長だった島田は、内務大臣から沖縄県知事になるか打診があった時、敢然として受諾した。上司である大阪府知事には「私が行かなければ誰かが行かなければならないでしょう。私が行きます」と言った。

島田は着任後県民の疎開と食糧の確保に、軍と協力し懸命の努力をした。島田の努力がなければ県民の損害はもっと多かつたと思う。島田と荒井警察部長は摩文仁の壕を出て何処で何時自決したのか判明しない。遺体も無いので海に身を投げたとも想像される。



島田知事と戦没沖縄県職員
の慰霊塔

義烈空挺隊慰霊祭

評議員 田中 賢一

沖縄南端摩文仁の丘には各都道府県の慰霊塔が立っている。その数32基に及ぶ。沖縄戦には全国の軍隊が参加しているの、このようになったが、摩文仁以外の場所に建立した県もある。それぞれ郷土の特色を現した塔が多い。

ところで、それらの塔のある地域の一番高いところに「義烈」の碑がある。この碑は昭和51年に建立したが、石は



「義烈」の碑

義烈が発進した熊本健軍飛行場の西に聳える金峯山から掘り出したもので、「義烈」の文字は奥山隊長の遺書にある文字を拡大して彫ったものである。

さて、この慰霊祭は、例年空挺同志会沖縄支部が主催で行われている。嘗ては沖縄にも昔の戦友がいたが皆物故し、今は自衛隊空挺部隊を除隊した者や、習志野の空挺部隊から沖縄の部隊に転属となった現職の自衛官で構成されておられ、人数は現職自衛官が大部分である。従ってこのお祭りの絶えることとはない。祭典の期日は義烈空挺隊が突入した5月24日に近い日ということで、自衛隊の行事を勘案して、本年は6月6日になった。

祭典は毎年神式で行われる。参加者は地元沖縄支部20名、沖縄以外の空挺同志会員6名、習志野の空挺団から7名、その他2名、計35名だった。嘗ては昔の戦友が十数名は参加したが、今回は私一人で、娘の同行で杖を曳きながら辛うじて辿り着いた。

義烈空挺隊の隊長奥山道郎は、私の1期下の陸士53期、初期から挺進部隊にいてごく親しい間柄、同じ聯隊ではなかったが、高鍋の料亭で杯を交わし、氣勢をあげた仲間だった。小隊長宇津木五郎は幹部候補生出身の将校で、私と同じく習志野の騎兵聯隊にいたとい

うので司令部の私の部屋によく話し込みに来た。そのような人達の魂に触れようと罷り出たが、これが最後になりそうに思った。

今回の祭典で、祭主である沖縄支部長の祭文の次に空挺同志会長、第一空挺団長、それに私が追悼文を奉ったが、私の一文だけ披露する。

論語に謂うあり 逝くものは斯くの如きか 昼夜を捨てずと 諸霊が国に殉ぜられしより六十三春秋を経ぬ嘗て志を同じうせし我ら 今や老歩蹒跚 杖を頼りに碑前に佇む 往時を懐古すれば 蒼桑の変を感じずんばあらず 諸霊の死以て貫きし忠誠心 今の人捨つるに弊履の如く 己れあつて国家あるを知らず 権利あつて義務あるを悟らず 我ら義烈の御霊に告ぐるに言葉に窮することあり 然れどもここに連なる自衛隊員は この祭典を主催し御霊を祀り後を継がんとせしあり 蠻せ給え

後に続くを信じて死地に赴かれし義烈の士に 戦火絶えたる現下 我ら何を以て報うべきか 他なし 義烈空挺隊員の史実と精神を後世に語り伝うるにあり 我ら余命僅かなるもこのこと掉尾の業とせむ

語りてもなお語りても尽きざるは 国に殉ぜしすらすらをのとも

わがよいい温めゆかむ後の世に語り伝うることを多ければ
平成二十一年六月六日
老耄の落下傘兵 田中賢一

○懇親会で話したこと

6日の晩は那覇市内のホテルで参列者全員が集い懇親会が行われた。その時冒頭に、私は持参した「靖國百人一首」を全員に配布し一席の話をした。これを編集するに当たり、各分類の初めに書いてある書物から歌を拾ったが、全部の歌のうちで最も感銘を覚えたのは航空特攻の中にある第五十五振武隊鷲尾克巳少尉の遺詠である。

告げもせで帰る戎衣の我が肩にもろ手をかけて笑ます母かも
特攻隊になつていふことを言い得ず、今生の別れ、心の中で泣いたのである。私もこの歌に接し涙を禁じ得なかつた。

同じような事例が我が義烈隊にもある。義烈の碑は昭和51年5月24日に除幕式を行ったのであるが、その日遺族戦友打ち揃って読谷の古戦場に行った。その時の金山清軍曹の妹の話。
「兄は4月29日休暇をもらって家に帰りました。その時落下傘降下の話はしてくれましたが、特攻隊になつていふことは言いませんでした。その晩は

父の仏壇の前に母と三人枕を並べて寝ました。それから一月足らずの後、義烈のことが新聞に出て、暫くして戦死の公報が来ました。今日はここの土を持ち帰り遺骨にいたします。」

私にとつても忘れたい話である。

○読谷飛行場跡に立ちて往時を偲ぶ

義烈の碑前祭の前日、参加者一同揃って読谷飛行場跡に行った。当時米軍の使っていた飛行場は嘉手納より読谷の方が大きかった。そこで読谷に8機、嘉手納に4機を向けた。うち読谷の2機、嘉手納の2機が故障や航法未熟で引き返し、不時着した。

飛行を確認する為同行した一一〇戦隊長草刈少佐は、読谷に4機、嘉手納に2機着陸と報じた。従つて我々は6機が突入出来たと信じていた。ところが戦後米軍の資料により、無傷で着陸出来たのは読谷1機だけと知った。そこで私は草刈さんにこのことを問い質してみた。草刈さんの答えは、着陸したら信号弾を上げることになつており、確かにそれだけの信号弾を見たということだった。暗夜のことでもあるし着陸寸前に信号弾を上げたとも思えるし、米軍の資料にも次のように出て

5月24日の晩、二〇〇〇空襲警報発

令され解除になつたのは二四〇〇だった。この間米襲を重ねること7回に及んだ。第1回の米襲の敵機は読谷、嘉手納の飛行場を爆撃し、第3、第4及び第6回目の米襲群も、飛行場に対する投弾に成功した。第7回目の米襲群は「挺進隊」と呼ぶ双発爆撃機5機からなり、二二三〇頃伊江島方向から低

空で侵入した。対空中隊はこれを要撃し、うち4機は炎上しながら読谷飛行場付近に突入した。しかし、最後の1機は胴体着陸し、読谷飛行場の滑走路を東北から西南に滑走した。忽ち少な

くとも8名の完全武装兵が躍り出て、滑走路に沿つて配置してあつた飛行機に手榴弾及び焼夷弾をもつて攻撃した。このため、コールセイア2機、C-54輸送機4機、ブライベティア1機が破壊され、そのほか26機が損害を被つた。日本軍空挺部隊のため惹起した混乱でアメリカ兵戦死1、負傷18を生じた。二三三八には増援部隊が到着し飛行場勤務部隊を支援し、さらに米襲を予想する空挺部隊に対する配置に就いた。

この戦闘のため総計33機の破壊損傷機を生じたほか、ドラム缶600個分のガソリンが炎上した。

調査の結果によれば、日本兵10名が読谷において戦死し、他の3名は飛行

機内において対空砲火により戦死していた。その他の突入機4機にはそれぞれ14名の兵士が乗っていたが、何れも炎上した飛行機内に散乱して発見された。遺体の総数は69を算した。

また、別の書物には次のように出ていた。第5番目の飛行機は指揮塔から約250フィートの滑走路上に胴体着陸した。約12名の日本兵が無事着陸し、少数の勇敢な者が如何なることが出来るかを実際に示した。飛行場に在つた飛行機が爆薬により破壊され炎上し始めた。コルセア3機、第一艦隊飛行団の2機及び輸送機2機が破壊され、その他29機が損傷を受けた。なお7万ガロンのガソリンが燃やされた。

この時の日本軍の挺進攻撃によつて想像を絶する混乱が基地内に起きた。小銃機関銃の銃弾が乱れ飛び、米軍に多数の死傷者が生じた。管制塔勤務のケーレー中尉は負傷後死亡し、他に18名が負傷した。中には足1本吹き飛ばされた海兵隊の搭乗員2名を含んでいる。日本兵は損傷した飛行機に隠れ、手榴弾を投げ、これにより4名が負傷した。日本兵の一人は翌日午後零時55分道路から敷に入り込もうとした時発見され射殺された。合計69名の日本兵の死体が数えられ海軍設営隊の手で埋葬された。捕虜になつた者は1名もな

く、ある者は自殺した。日本軍はこの戦闘で飛行機9機を破壊し、29機に損傷を与え、日本軍の損害はただの5機だった(この挺進攻撃の目的は、翌日の航空特攻の支援にあるのだが、それについて論述した米軍の文書は見当たらない)。

また別の書物には次の一文がある。この全く信ずることの出来ない突発事とそれに続く混乱の模様を詳しく書くことは難しい。何故ならその大部分は、話から話に伝わつてゆくうちに、真実が判らなくなつてしまつたからである。

米軍の資料の引用はこれまでとする。

読谷飛行場跡に立ちて
この辺境に 散りしをのこら
狂乱を 既倒に廻らさんの心
燃えさかる 臍敵の とりで
路傍の小石よ 汝は 見しか
かつての叫喚 阿修羅の怒号
語り聞かせよ いくさ神の姿
泰平の美酒に酔う うつし世
知る人ぞ知る 丹きまごころ
あとに続けと 残せしことば
今ここに つどいしともがら
世につげむ 失いしやまと心
取り戻さずんば み国危しと

赤い夕日の旧満洲紀行

評議員 野口 清三

財団法人三笠保存会の企画により、平成20年10月22日から25日までの3泊4日の日程で、中国北部(旧満洲)の大連・旅順・瀋陽(旧奉天)の研修旅行に参加した。

私は10年振りの訪問で、前回は10日間の船便の旅であった。同地のその後の変わり様はどうだろうか、興味津津で参加した。参加者は33名、その内ご婦人は6名であった。三笠保存会とJTBから添乗員が各1名付いての団体旅行であった。

大連は国際都市で、開放的であり、旅順は軍事施設が多く、瀋陽は政治商業都市として、それぞれ特色のある街であった。

第1日(10月22日)

午前11時半成田空港第2ターミナル内の指定場所に集合。通関手続後、中国南方航空機に搭乗。13時25分発、韓国西海岸に沿って北上し、約3時間で大連空港着(時差1時間)。通関後、専用バスで約30分、宿舎に到着して旅装を解く。

第2日(10月23日)

大連から旅順へ専用バスにて移動。雨の中、旅大道路を約1時間走って旅順市に到着。同市は遼東半島の最南端に位置し、面積約500平方キロ、人口約22人で、大連の行政区画であり、中国の観光名所に指定されている。

私は、昭和18(1943)年4月から終戦まで足掛け3年、学徒動員の海軍兵科予備学生(高等専門学校卒)、同予備生徒(同在学中)約3千名に対し、基礎教育(士官教育)の教員に任命され、此処旅順でこれに従事したため、忘れられない思い出があらちちらに多く残っている。

同市は新・旧市街に分かれ、軍港警備上入ることが許されず、在泊艦船や著名な白玉山上の表忠塔などの見物は出来なかった。

《参考》

「日露戦争開戦前史要約」

明治27、28年日清戦争に勝利し、講和条約締結後、我が国に割譲された遼東半島の返還を、露・独・仏の三国が要求(三国干渉)。我が国はやむなくこれに応じ、以後臥薪嘗胆。

ロシアは、南下政策により満洲を支配し、更に朝鮮への侵出を目論む。これに対し、我が国は日英同盟を締結。満洲問題をめぐる日露談判決裂し、国交

断絶。明治37年日露戦争開戦となった。

「旅順戦跡めぐり 二〇三高地」

戦史によれば、ロシアは不凍港旅順に東洋一の要塞を建設。明治37(1904)年5月、旅順要塞攻略が決定され、乃木第三軍は同年8月から12月にかけて3回の総攻撃を決行したが、難攻不落。8月の第1回、10月の第2回とも失敗に終わり、11月末から12月にかけての第3回の総攻撃では、二〇三高地の攻略を主攻し、内地から運んだ要塞砲28榴榴砲(防衛大学校に展示されている)が威力を発揮し、将兵の勇戦敢闘によりようやく陥落させた。

今は、二〇三高地の頂上近くまで登ることができ、そこでは乃木大将の筆による、約10米の記念碑「爾靈山」に拝礼した。雨のため霞がかかり、残念ながら同山から港内は見えなかった。また、東鶏冠山北・二龍山・松寿山の三保塁も、正攻法による攻略には難渋しながらも遂に陥落した、との説明があった。

「水師営の会見」

日露戦争最大の激戦地二〇三高地と三保塁、望台等の陥落により露軍は遂に降伏し、明治38年1月5日、此処水師営の民家で乃木大将と露軍ステッセ中将の会見が行われた。お互いに母国のために死力を尽くして勇敢に戦っ

た功を称え合った。

佐々木信綱作詞、岡野貞一作曲

「水師営の会見」(文部省『尋常小学校読本・唱歌』)

一 旅順開城約なりて
敵の將軍ステッセル
乃木大将と会見の
所はいずこ水師営

四 昨日の敵は今日の友
語る言葉もうちとけて
私はたたえつ彼の防備
彼は称えつ我が武勇

九 「さらば」と握手ねんごろに
別れて行くや右左
砲音絶えし砲台に
ひらめき立てり日の御旗

会見の建物は修復されており、その時に使用された机も展示されていた。会見場を背景に、参加者全員による記念撮影を行い、想いを深くした。商売上手な中国人のお土産店が並び、記念品を売っていた。会食場もあり、そこで昼食をとった。

「旅順から大連へ」

大連は、総面積1万2千平方キロ余り、総人口590万人の中国第4位の大都市である。因みに第1位は重慶で3千万人、第2位が上海、第3位が北京、第5位が瀋陽とのことであった。我が国は日露戦争後、遼東半島の権

益を収め、南満洲鉄道会社を創設、数十万人の移民を送り、同国の発展に貢献した。

大連の市街地は整備され、名物のアカシア並木が、5月には美しい花を咲かせて、一段と華やいだ街になるようである。中山広場、大和ホテル、満鉄ビルなども見ることができた。貿易港として益々発展するのではないかと感じられた。

第3日(10月24日)

早朝宿舎を発つて大連駅に向かう。大連駅は、東京上野駅をモデルに建設されたと聞く。待合室は旅行客で大混雑している中を、特別団体改札口より入り、午前9時発の特急列車に乗り、正午頃に瀋陽に到着した。

満鉄時代には、蒸気機関車のアジア号が有名であったが、現在は電車に変わり、揺れも少なく快適な旅を続けることができた。戦前は、王道楽土の満洲と耳にしたが、現在は人口も増加して、沿線はすっかり民家が立ち並び、空き地は見受けられなかった。鞍山の鉄鋼業、撫順の石炭は有名で、我が国の産業分野の発展に多大な貢献があったことが忘れられない。瀋陽(奉天)では、満洲鉄道局のあった鉄路局、瀋陽故宮、日本人街などを見学したが、さすがに広大な街で道路も広く、経済

都市として活況を呈していた。ただ故宮は建物だけで財宝の類は何もなかった。日本人街は壊されつつあったが、昼まで降っていた雨も上がり、広大な満洲を夕日が染めた。戦前の満洲原野を真紅に染めた夕陽が胸に迫り、感慨深いものがあった。

奉天大会戦において大勝利を収められた大山元帥閣下以下多くの将兵の武勲に感謝を申し上げ、また、日露戦争において名誉の戦死を遂げられた多くの英霊に敬意と感謝の誠を捧げた。

最後の夜ということで、宮廷料理が用意されたが、さほどの料理とは感じ

なかった。

第4日(10月25日)

早朝専用バスで宿舎を出発、約30分で瀋陽空港に到着。通関手続きを済ませ、8時30分発の中国南方航空便に搭

乗し、12時30分成田空港に到着した。幸い、全員が無事に全ての行程を終えることができ、実りの多い旅であった。



旅順攻防戦最後の激戦地203高地に立つ「記念塔」。乃木将軍は203高地を「爾靈山」と名づけ記念塔に遺した。この戦いだけで日本軍の戦死傷者は約1万余、露軍は約5千3百余と言われる。



東鶏冠山北



203高地

碑は語る特攻隊⑫

田中 賢一

海軍落下傘部隊



嘗ての基地館山の市外安房神社にある

陸軍落下傘部隊のレイテ島東部に降下した部隊は、第四航空軍の手落ちにより従来特攻隊として認められていなかったが、我が協会が今般（平成20年8月）発行した『特別攻撃隊全史』では、特攻の中に含めて掲載している。これに対し、海軍落下傘部隊については、将来とも特攻隊として語られることはないだろう。従って本稿の標題は偽りと言うべきか。しかし、我が国最初（陸軍より先）の落下傘降下作戦を行ったことは、特攻に劣らぬ決意があったので、敢えてこの系列に含ませて紹介させてもらおう。

海軍が落下傘部隊を持った理由
陸軍が別々に落下傘部隊を持った国は日本だけである。米英は陸軍に、独は空軍に所属していた。我が国では、陸軍共に航空部隊に組み入れていた。我が陸軍は従来北を向いていた。これに対し海軍は、米英相手て南を向いていた。このことが、海軍では陸軍がいなくても統合作戦をやるうという考えの根底にあった。
石油資源入手を目的に、今次大戦に踏み切り、陸海軍共に南進となった。当初の戦略目標はジャワにあり、これに対し陸軍はマレー、スマトラとボルネオの西側を進攻した。一方海軍はボルネオの東側を進攻することになる。進攻には進路上の航空基地を奪取しなければならぬ。海軍は陸戦隊を持っていたが、それだけでは不十分なので落下傘部隊を自前で持とうとした。

海軍落下傘部隊の創設

海軍がドイツの落下傘部隊の活躍に刺激されて、研究を始めたことは陸軍と同じである。昭和15年11月横須賀航空隊の中に実験部隊が設けられ、山辺中尉以下24名が研究員となり、落下傘降下の研究を始めた。陸軍より1カ月前くどちらも暗中模索であった。初降下は昭和16年1月15日、これも陸軍より1カ月前。6月には館山海軍砲術

学校内に移り、陸戦兵器の研究と陸戦訓練を始めた。その時の研究員は75名だった。
9月初旬海軍は11月末を目途に750名の部隊2個を作ることを決め、それまでに1500名の落下傘兵の養成を命じた。部隊名を横須賀鎮守府第一特別陸戦隊及び同第三特別陸戦隊と称し、各海兵团や艦隊から要員を集めた。また、九六式陸上攻撃機を改修して九六式輸送機を造り、輸送機隊も編成した。激しい訓練で開傘事故により2名が、更に過って海上に降下し1名の殉職者を出した。11月16日、軍令部総長以下海軍首脳部立会のもと、霞ヶ浦で最後の総合演習が行われ、一応2個隊が出来上がった。
メナド降下作戦
この作戦は第十一航空艦隊の指揮下で行われた。目標はメナドのランゴアン飛行場である。1月11日堀内部隊長率いる第一特別陸戦隊2個中隊334名は、輸送機28機に分乗、ミンダナオ島のダバオを発進し、〇九五二ランゴアン飛行場に高度150で降下した。飛行場にはトーチカがあり、滑走路には障害物が置いてある。投下物料を拾う暇もなく拳銃と手榴弾だけで戦闘をする。味方の戦闘機が上空にあるが彼我混淆し支援も出来ない。敵は装甲車

まで繰り出し物的戦力は敵が絶対優勢だが、二番目に降下した中隊がトーチカの上と背後に着地したので、敵が崩れ出し、2時間後には完全に飛行場を占領出来た。戦死31名、重傷26名。
これについて思うことは、よくも敵飛行場の真上に降下する決心が出来たものだ。陸軍のパレンバン飛行場攻撃に当たり、拳銃と手榴弾だけを持って飛行場に直接降下する決心はつかなかった。飛行場の南と西に降下場を選定し、三方から攻撃に向かった、兵力の不足から北をあけておいたのが、結果的によかったのかも知れない。敵は北方へ逃げた。それでも32名の戦死者を出したが、その半分は増援に駆け付

まで繰り出し物的戦力は敵が絶対優勢だが、二番目に降下した中隊がトーチカの上と背後に着地したので、敵が崩れ出し、2時間後には完全に飛行場を占領出来た。戦死31名、重傷26名。
これについて思うことは、よくも敵飛行場の真上に降下する決心が出来たものだ。陸軍のパレンバン飛行場攻撃に当たり、拳銃と手榴弾だけを持って飛行場に直接降下する決心はつかなかった。飛行場の南と西に降下場を選定し、三方から攻撃に向かった、兵力の不足から北をあけておいたのが、結果的によかったのかも知れない。敵は北方へ逃げた。それでも32名の戦死者を出したが、その半分は増援に駆け付



メナド降下（当時の油絵）

けた敵との戦闘によるものである。

メナド空挺作戦のことは、陸軍の要請でパレンバン作戦が終わるまで発表が保留された。

クーパー降下作戦

2回目の作戦は、横須賀第三特別陸戦隊が、2月20日、セレス島のケンダリーを発進し、チモール島のクーパーに一〇三〇降下した。28機の輸送機で2個中隊308名が降下した。翌日残りの323名が降下した。前回飛行場に直接降下して思わぬ損害を出したので、今度は東方に10キロ離れて降下した。草原と思った所は膝を没する湿地だったが、敵がいないので完全に武

装を整えることが出来た。

道路沿いに飛行場に向かうと兵舎があり、これは難無く占領したが、飛行場方面から装甲車を有する敵が現れ、激戦となった。実は陸軍の東方支隊(第

三十八歩兵団長の指揮する歩兵1個聯隊(幹部の部隊)がチモール島の南岸に上陸し、クーパー及びブトン(クーパーの飛行場)に向かいつつあった。これに怯えた敵は戦わずに東方に退却したので、降下部隊はこの敵と正面から衝突したのだ。退路遮断の形にはなったものの、窮鼠猫を咬むの喩えで、軽火器しか持たない降下部隊は苦戦し、戦死24名、重傷35名の損害を出し

た。上陸部隊の方が先に飛行場を占領するという妙な結果となった。

海軍落下傘部隊の作戦は、以上の二つで終わり、部隊は一般の陸戦隊となった。

第一特別陸戦隊長堀内豊秋中佐

メナド降下部隊指揮官だったこの人は、戦後オランダの報復裁判で死刑になった。何故死刑になったか、聞くところによれば、メナドの戦場で捕虜となったオランダ兵を、かねて虐められていた土民が殴り殺した。これについて捕虜の取扱いの落ちが理由だというが、日本軍が占領する前のオランダ軍土民に対する所業はどんなだったの

か。調べたのか。

遺書の冒頭部分だけ紹介する。

「九月二十三日(昭和23年)突然執行の通知を受け二十五日午前八時に執行されることとなった。在世中は真に幸福な生活だった。執行の日まで刑務所内でも多くのインドネシア人の尊敬を受け何物かを残した。(以下略)

月に雲花に嵐と悟り得て
身は秋晴のそらをまつのみ



堀内豊秋中佐

特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の戦後の歩み

副会長 菅原 道熙

はじめに

昭和27年5月5日、東京都豊島区音羽の護国寺で、陸海軍それぞれ1体ずつの特攻平和観音像の開眼法要が営まれて以来、57年の歳月が経過した。

終戦時まで、陸海軍の枢要な地位に在って特攻作戦に関与した方々は、特攻戦死者に対して慰霊顕彰の誠を捧げ、後々までその崇高な行為が伝え続

けられることを願って、昭和31年に特攻平和観音奉賛会(以下「奉賛会」と略称する)を設立した。やがて奉賛会を引き継いだ第二世代と称されるべき方々も、今や総て故人となってしまう。

終戦当時20歳未満の、陸海軍関係最若輩であった年代層は、奉賛会発足以来慰霊顕彰行事の奉仕を続けてきたが、言わば第三世代末期と称せられるべき年代の会員も、既に全員傘寿を越えた現在では、その世代から昭和二桁

代以降に生まれた会員へ、特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の継承が始められた時代であると言えよう。

大阪芸術大学の学生、教職員有志が結成した「日本人の心を伝える会」(世話人代表富田和夫氏)が、CD、あ、特攻」を制作し、その売上げで全国の護国神社に「特攻勇士之像」を奉納して、後世に特攻隊の史実を伝えたいとの願いは、現実のものとなって今年3月28日には、7体目が群馬県護国神社に奉納されている。

特攻作戦の実態や特攻隊員については、知覧特攻平和会館を筆頭に、各地の記念館で、その展示物は訪れる人々に深い感銘を与えている。また、特攻に係する図書も数多く刊行されている。

しかしながら、戦後の特攻隊戦没者慰霊顕彰事業の原点である、特攻平和観音の造立、奉賛会の結成に至るまでの経緯については、ほとんど知られていない。このままでは本事業の戦後初期史は、時の流れの中に埋没されてしまふであろう。

次世代に対して、慰霊顕彰事業を継承し、奉賛会結成に至る経緯について伝承して行くことを急がなければならない。

世田谷山観音寺前住職の太田賢照師は、当時のことを見聞した今や唯一人の生き証人である。賢照和尚からの聞き取りを中心に、奉賛会が結成される

に至るまでの期間に重点を置いて、その経緯について記述して行きたい。

その一 神風忌

昭和19年10月25日、関行男海軍大尉を長とする零戦隊5機が、神風特別攻撃隊「敷島隊」として、フィリピン・ルソン島東マバラカット飛行場から出撃し、レイテ・スルアン島東方洋上で中型航空母艦4隻を基幹とする米軍機動部隊を捕捉、空母1隻撃沈、同1隻炎上撃破、巡洋艦1隻轟沈（豊田副武連合艦隊司令長官布告・米軍資料では空母1隻撃沈、同1隻大破、同2隻小破）の大戦果を挙げたその日から2年後の、昭和21年10月25日、当時は占領軍指令で旧軍人が5名以上集まることは禁止されていた中を、第一航空艦隊（以下「一航艦」と略称する。「二航艦」についても同じ。）司令部首席参謀であった猪口（後に詫間と改姓）力平氏の提案によって、一、二両艦隊司令部部員十数名が、秘かに芝増上寺塔頭「安蓮社」に集まり、大東亜戦争末期の海軍航空特攻戦没者の供養を営み、引き続いて毎年同月同日に、「安蓮社」での供養を続けていた。

昭和25年6月に朝鮮戦争が始まって占領軍は急遽警察予備隊の創設を日本政府に指令、占領軍は旧軍人に対する方針を180度転換した。

隠密行動を取る必要がなくなつて、昭和26年からは、供養出席者名簿が作られるようになり、神風特攻隊員の供養であるから、「神風忌」と呼称することが決められた。

名簿には、一航艦司令長官大西瀧治郎未亡人大西淑恵、大西長官の前任者岡謹平、二航艦司令長官福留繁、一航艦司令部首席参謀猪口力平、201航空隊飛行長中島正、二航艦司令部参謀富士信夫、大西長官副官門司親徳以下全出席者24名の氏名が列記されている。

以後「神風忌」は毎年20名前後の参列者によって供養が続けられたが、その存在は他の旧海軍軍人に知らされることなく終始したようである。

昭和58年に詫間氏が亡くなって富士信夫氏が代わり、氏が平成17年に亡くなって、更に門司親徳氏に引き継がれたが、門司氏も平成19年に病に倒れて昨年亡くなられた。かくて、「神風忌」は平成18年の第61回を以て終止符が打たれるに至つた。

このように、目立つことなく終始した「神風忌」であったが、これこそが奉賛会設立の原点であることは、間違いないことである。

その二 平和観音会の発足

萬物 平和観音造立趣意（原文）

人類平和の犠牲となつたまゝ、忘れられて未だ真に慰められぬ無辜の靈が今もなほ我々の周邊にひしめいています。これどうして清浄な國土、平和な世界が築きませう。

何とかしてもつと温かい親しい気持ちでこの寂しい靈を慰める途はないものでせうか。こゝに深く感ずる所があり、先づは二百體の大悲觀世音菩薩像を造立し奉りたいと發願いたしました。

平和観音靈像は大和法隆寺の秘佛『夢ちがひ觀音様』のお姿を寫して謹作したものであります。『夢ちがひ觀音』は日本の數多い國寶の内でも特にその優雅柔和な御微笑みの故に世界的に有名で、往古から悪夢を見た時にこの觀音様に御祈りすれば、その悪夢を転じて幸運に導き給うといはれた靈佛であります。

戦争の悪夢に馮かれて空しく散つた恨みの靈をこの靈像に蘇らせて、萬人に拝まれる世界の平和觀音として永久に御祭りしたいものであります。皆様の篤い涙につ、まれて微笑み給う御姿を一日も早く成就したいものであります。希はくは此の趣旨を御覽の皆様は、どうか一瞬瞑目合掌して静かに有縁無縁冥福を祈り、併せて怨親平等の真心を

捧げ、この本願成就に御協力下さらんことを切に御願ひいたします。

合掌

南無大慈大悲觀世音菩薩
有縁無縁怨親各靈皆成佛道

昭和廿五年十月十日

發願者 静岡市清水寺住職

權大僧正 吉井芳純

日光山華藏院住職

大正大學教授 關口慈光

この趣意書は、平和観音会の設立から半年余を経過した昭和26年5月22日に、平和観音会が発行した観音教本の末尾に掲載されたものである。

死、或いは靈というものをどう考えるかは、人によって様々であろう。發願者が、僧侶として、大東亜戦争全戦没者の靈が、戦後5年を経て尚このような状態であると考えていたことが示されている。

發願主が法隆寺貫主佐伯定胤大僧正に、同寺の秘仏である「夢違い觀音」を平和観音として縮尺模造することを願ひ出て、特別の許可を得たこと、仏像は高さ一尺八寸として、元法隆寺修理事務所長古宇田 実神戸工専名誉教授の指導の下に鑄造されることが付記されている。

法隆寺の許可が下りて直ちに会を發足させてから、像の鑄造その他具体的

な計画を練り上げるのに半年余りを必要としたのであろう。

世田谷観音寺前住職太田賢照師によると、神風特別攻撃隊初出撃時に、海軍軍令部総長として、海軍の作戦全般の最高責任者であった及川古志郎大將は、戦時中に関口眞大(慈光)師と、仏教研究者としての交流が始まったという。

昭和58年に刊行された及川古志郎大將生誕百周年記念誌によると、若い頃の及川大將は文学青年で、盛岡中学時代に2年後輩の石川啄木と親交があり、その頃から読書家で、大正5(11)年の東宮武官時代(少佐・中佐)には、丸善から多数の図書を購入することで、店としては大將専属の店員を配置したという。

哲学的な立場から仏教思想を研究し、その一端は記念誌に収録されている。関口眞大師は文学博士として教育

界でも活躍し、昭和50年代初めまで正大学教授の職にあった。

また大將は、周りの人達に海軍の教育が「術」に偏り過ぎて基本となるべき「哲学」や「史学」、ないしは「政治」をなおざりにしてきたと反省の弁を述べ、海軍大学校長時代には、京都帝国大学哲学科教授達の協力を得て、新教育方針を決めようとしたこともあったという。

昭和21年10月25日に、第1回神風忌が芝増上寺塔頭の安蓮社で営まれたことは、前述したが、この法要を営むに当たっては、関係者が事前、事後に大將に報告していたであろうし、そのことは更に大將から関口師にも伝えられて、関口師の平和観音会設立への最初の動機となったのではなからうか。

一方、陸軍の終戦時の航空総軍司令官河辺正三大將も熱心な仏教徒であっ

いる。当協会では、この各地の慰霊祭に代表を派遣して、御霊の慰霊顕彰に努めている。

私は今年、4月4日の鹿屋、5日の東シナ海洋上、6日の徳之島大布岬、7日の枕崎の各特攻慰霊祭に参列し、巡拝してきた。その状況について報告します。

た。世田谷観音寺収蔵の資料に、及川・河辺両大將は平和観音会に入会していたと記されているが、河辺大將が何時頃、戦時中から続いてきた関口・及川の交友討論の場に加わるようになったのかは、定かでない。

平和観音会が発足した昭和25年10月10日は、法隆寺から夢違い観音像模造の許可が下りた直後であったろう。この年の6月25日に朝鮮戦争が勃発して、占領軍の対日政策が180度転回し、旧軍人は監視される立場から、警察予備隊創設に協力を依頼される立場に変わった。

この様な社会情勢の変化があつて、人目を忍んで行われていた神風忌法要、関口師と及川大將の間で話し合われていたであろう全戦没者の成仏祈願と、特攻隊戦没者慰霊顕彰をどの様に具体化していくのかということも、人

目を憚る必要がなくなつて、平和観音会設立への動きが一気に活発化した可能性は否定出来ないものと思われる。しかしながら、設立趣意書の内容については、両大將共に釈然としなかつたであろうことは、次章「その三 特攻平和観音像の開眼法要」で触れる予定である。両大將は、特別攻撃隊戦没者慰霊顕彰を如何にして具現していくかに関して、関口師と検討したであろうが、大東亜戦争全戦没者を対象とする関口師の構想に先ず従つて、造立された夢違い観音像を、海軍は神風特攻平和観音として、陸軍は特攻平和観音として奉戴することで慰霊顕彰の実現を期したと推測される。

したがって、設立趣意書の内容、文言については、何等の異議は唱えなかつたのではなからうか。

1 鹿屋

4月3日(金)、空路鹿兒島に入った。

海自第1航空群の支援を得て、鹿屋に移動し、前泊した。顔見知りである鹿屋基地の現役指揮官達と、久し振りに夕食を共にして旧交を温めた。特に、

第1航空群司令の坂田海将補は、私が海上幕僚長であった時の先任副官というご縁である。この夜、皆で食べた「肝

属黒毛和牛」がとても美味しかった。会話も弾んだ。

翌4月4日(土)、「旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」当日は、朝から土砂降りの大雨であった。珍しいことである。

小塚公園慰霊塔前広場の会場では、白いテントが張られ、足元には吸水の藎が敷かれるなど、遠路来られた老齡

平成21年度

春の南九州特攻慰霊巡拝 「鹿屋、徳之島、東シナ 海洋上、枕崎」

理事長 藤田 幸生

毎年春になると、南九州各地で、特攻隊戦没者に対する慰霊祭が行われて

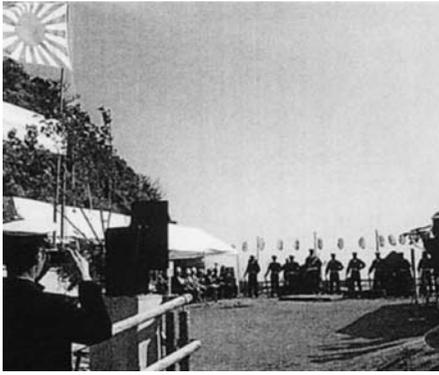


写真1 (鹿屋)

の参列者のために、万全の準備がされていた(写真1)。例年通りテントいっぱい満員の参列者であった。

海上自衛隊鹿屋航空基地から儀仗隊、ラッパ隊が、また、音楽隊は地元消防団から参加していた。

鹿屋市主催の慰霊祭は、10時30分から12時の間実施されたが、その開式直前に、それまでの雨が嘘のようにぴたりと上がった。式典は、例年とほぼ同じように、式次第に沿って行われた。

追悼飛行も、悪天候の中、編隊飛行をP3C単機に変更し、超低空で実施された。第1航空群の強い意向によるものであり、迫力があつた。参列者に感動を与えていた。

特に印象深かつたのは、熊本から見えられたご遺族代表大石氏の「忘れな

い!伝えたい!”という追悼の言葉、既に老齢に達している生存戦友一同による碑前での「同期の桜」の合唱、それに神雷隊のご遺族代表三輪氏の心の籠もつた謝辞であった。また、土砂降りの雨が、開式と同時に上がったことは、まるで英霊のご加護によるように感じられた。

若い二世代、三世代が混じっていたのが、目についた。

2 徳之島

5日の夕刻、鹿児島新港からフェリーの定期航路に乗り、徳之島に向かった。水上特攻作戦を実施した戦艦「大和」を旗艦とする第二艦隊のご遺族、生存者の皆さんの慰霊団(団長・池田武邦様)の一行に同行しての2泊3日の慰霊旅行である。2泊とも鹿児島・徳之島往復の船内泊であった。

往復の航海は、英霊のご加護によってか、船はあまり揺れることもなかった。6日の早朝、無事に徳之島の海の玄関である亀徳港に着いた。港では、地元、徳之島伊仙町の皆さんが、慰霊旅行団を出迎えてくれた。知人が沢山いて、島の人々の温かい気持ちを感じられた。伊仙町は、私達がこの日に慰霊祭を慰霊訪問することとしたため、慰霊祭の期日を、艦隊が沈められた7日から1日繰り上げて、この6日に実施す



写真2 (徳之島)

ることにしていた。

港から「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」(高松宮様御揮毫、中村晋也氏デザイン)のある大田布岬までの往復は、貸切りバスで移動した。片道1時間ばかりである。海岸線が美しく、緑の芝に覆われた岬に建つ慰霊塔は、高さが大和の艦橋の高さに合わせた26メートルの大きさである。昭和43年に建立されて以来年月が経ち、この間の潮風による風化が進み、危険

状態になっていた。地元で再建計画がある。当協会も以前から募金に協力しているが、まだ資金不足で、計画は進んでいないようだ。式典当日は強風の中、この慰霊塔の前に祭壇、テントが設けられていた(写真2)。

慰霊祭は、地元の伊仙町が執行し、池田慰霊団長の言葉に続き、突然指名されたので、私も特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会を代表して慰霊の言葉を献上した。地元の皆さんによる素朴な御

神楽が奉奏されたが、そのお気持ち嬉しかった。英霊の皆様も、さぞ喜ばれたことであろう。

慰霊塔の再建修理は、急務であると感じた。

3 東シナ海洋上

4月6日(月)夕刻17時過ぎに、私達を乗せた船は、亀徳港を出港した。夕闇迫る中、東シナ海の船の航路上で、同行していた神職により洋上慰霊祭が実施された。ご遺族の皆さんは、持参していたお神酒など供え物を、それぞれに思いを込めて洋上に捧げていた。想いは深く、海は静かであった。

この慰霊団に同行していた作家の梯久美子さんが、一刻の時間を惜しむかのように、熱心にご遺族などから話を聴き出しておられた。

4 枕崎

鹿児島入港前、甲板に出て日の出を見た。洋上における日の出は、何度見てもやはり美しかった。4月7日(火)8時30分頃、船は鹿児島新港に入港した。お年寄りの多い慰霊団体の皆さんではあったが、皆、疲れも見せず、団体貸切りバスに乗り込んで、枕崎方面に向かった。途中、知覧に立ち寄り、参拝、休憩し、更に坊津岬まで出向き、岬の上から遥か南方海上に向かって焼香した後、枕崎の火の神公園にある平



写真3 (枕崎)

和祈念展望台に向かった。好天に恵まれ、青い空、青い海、緑の岬・・・ここでも景色は美しかった。

枕崎平和祈念展望台における「海上特攻第二艦隊戦没者追悼式」は、平和祈念展望台奉賛会(会長島野宏之氏)主催により、例年通り実施された。展望台に登る沿道には、今年も新しい石灯籠が3基、寄付除幕された。駐車場等周辺の施設等も、整備が進んで、落ち着いた雰囲気醸し出されていた。奉賛会の功労者、前会長で顧問になられている岩田三千年氏も、お元気で式典に参列されていた。

式典は、陸上自衛隊国分部隊の音楽隊、海上自衛隊鹿屋基地の儀仗隊、ラッパ隊の参加支援を得て、全国から集

まったご遺族、戦友、関係者、地元の国会議員、県会議員、市会議員、市の職員など多数の皆様参列の下、盛大厳粛に行われた。今年は参加人員も多く、特に、当協会の瀬島前会長のご遺族母子、名古屋私立南山中学校男子部生徒、地元鹿児島水産高校生徒会長等が言葉を奏上、献歌をされるなど、若い人達の活動が顕著であったことは、印象深く感激であった。心強く感じた。式では、奉賛会長のご挨拶に続いて最初に、我が協会が、以下の通り祭文を奏上した。

「平成21年枕崎平和祈念展望台

海上特攻第二艦隊戦没者追悼式

祭文

今年もまた、四月七日の今日を迎えました。六十四年前のこの日、このとき、この目前に広がる海のはるか南方海面において、帝国海軍聯合艦隊最後の戦いが行われました。ご遺族、戦友、関係者一同がここに集い、この戦いで散華された英霊の皆様に応じ上げます。皆様は、大戦の末期、極めて厳しい戦況の中で、お一人お一人が様々な想いと覚悟をもって、その戦いに臨まれました。皆様方のその想いを想像するだけで、私達は、多くのことを学ぶことができると思われます。それらは、言葉で言い尽くせるものではありません。

あの戦いから六十有余年を経た今の日本は、当時とは、社会の体制も、人々の生活や考え方も、さらには、物の豊かさにおいても、想像もできないほど大きく変わってきております。しかしながら、皆様方が、命がけで護り、築こうとされた未来に生かされている私達は、今なお、皆様方の想いから学ばなければならぬことを、多々見出すのであります。美しい国土と我が民族、祖国の安泰を願い、一身を擲つて、海に散華された皆様の想いは、日本人の類稀なる精神文化の真髄が発揮されたものであります。それ故に、これらは、永遠にその意義を失うことなく、これからも子々孫々に伝えられ、私達を導いてくれることでありましょう。

皆様が生きた苦難の時代を経てきたにも拘わらず、今もなお人の世は、国の内外を問わず、極めて混沌した情勢に陥っております。すなわち、米国の金融経済の破綻は、世界に拡大し、深刻化してきております。米国の国際社会における相対的地位は低下し、国際秩序も大きく揺らぎ始めてきております。中東等における各種紛争、核の拡散、テロや海賊の問題など、国際社会は未曾有の混沌の中にあり、我が国も国際社会の一員として、インド洋に、ソマリア沖にと部隊を派遣し、それらの解決のために力を尽くしているところでありますが、未だ解決の手段を見出すに至っておりません。我が国周辺においても、北朝鮮の核保有、ミサイル発射、中国の空母を始めとする軍備急増や東シナ海、尖閣諸島の言動等、日本は、再び正念場を迎えていると言つても過言ではありません。このような状況は、正に、数十年前の歴史を繰り返していると思えないものがあります。私達国民は、国家の尊厳を保ち、生き抜いていくために、今こそ皆様のことに思いを致し、その精神を学び、自主防衛の気概と戦略を持ち、戦争に至らない抑止の実力を整備すべきときであると痛感しております。私達は、ここに見る、このような慰霊顕彰活動が、我が国の再生の一助になることを信じ、今後の活動の継承と更なる充実を誓うものであります。在天の御霊、どうか私どもを宜しくお導きください。そして、なお一層のご加護を賜りますように心からお願ひ申し上げます。平成二十一年四月七日

(財) 特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会

会長 山本 卓真

平成21年度第35回荒鷲之碑 慰霊祭に参列して

理事長 藤田 幸生

1 平成21年度第35回荒鷲之碑慰霊祭が、平成21年4月11日(土)、元熊谷陸軍飛行学校跡(現航空自衛隊熊谷基地)で行われた。同碑奉賛会関利雄会長からのご案内をいただき、協会から白田智子理事、倉形桃代評議員等と理事長の藤田が参列した。

名、戦友等約160名、ご来賓も、小島敏男衆議院議員他地元出身の国会議員やそのOBである増田敏男先生など、並びに富岡清熊谷市長、川本宣彦埼玉防衛協会会長、安城正明事務局長など10余名、更にまた、航空自衛隊熊谷基地からは、基地指令の国分雅宏空将補以下基地内の主要幹部15名などと、例年以上の多数の参列者を得て、式典は盛大に執り行われた。

当日は、春の好天に恵まれ、陽射しが強かった。基地の中は、開花後の気温変化によってこの日まで咲き残って

内、接待に至るまで、休日にもかかわらず、隊員が全ての支援をしてくれていた。その隊員達の顔付きは、皆明るかった。

5 休日に特別オープンしてくれた売店では、様々な記念になるグッズが人気を呼んでいたが、中でも熊谷基地が昭和10年に開隊された時に作られて以

後このようなお気持ちを受け継いで、慰霊活動を続けていかなければならぬと決意を新たにした次第である。

「この熊谷飛行学校からは10年余りの間に、約1万人の操縦者達が巣立ち、遠く南溟の果てに、はたまた北辺の地に、祖国の繁栄と民族の安泰を信じつつ、身を挺して勇戦奮闘し、赫々たる武勲を残しましたが、その多くは従容と身を鴻毛の軽きにおき、国を護るは武人の榮譽と、莞爾として雲流るる果てに、或いは大海原の彼方に紅蓮の炎となつて散華されて逝きました。」

2 私にとって、この慰霊祭参列は初めてであった。私事であるが、高知から上京してきた少飛14期生の長兄藤田典正と一緒に参加できた特別の参拝であった。大正生まれの長兄は、85歳で腰も曲がって杖を突いているが、今回が最後の慰霊祭になるということ、高知にいるもう一人の同期生一柳逸男氏と共に、当日の朝、東京着の夜行高速バスで上京、慰霊祭に参列したものである。年齢も離れており、今まで全く別の世界で生きてきた私達兄弟にとって、生涯で初めて人生がクロスした感慨深い慰霊祭であった。

温変化によってこの日まで咲き残って

舞っていた。全国からの参列者が集う中、航空自衛隊熊谷基地隊員によって行事の全体が執行された。今までに、数々の慰霊祭等に参列したが、地元の部隊が中心になって司会進行等を実行する慰霊祭は、私にとって初めてであり、新鮮であった。今後の戦没者慰霊祭をどのような形で引き継いでいけばよいかを考えていく上で、一つの雛形となるやり方ではないかと感じた次第である。現役自衛官に感謝したい気持ちで一杯になった。

6 懇親会では、各出身の同期生会ごとの席が設けられ、再開を祝し合うと共に、最後の別れを惜しんでいる姿が数多く見受けられた。私は、来賓席から幾度か長兄のいる少飛14期生のテーブルに顔を出したが、その中に旧知の方達が数人おられて、お互いそのご縁に驚かされた次第である。

私達は、これらの人々のため永遠に慰霊の誠を捧げるべきですが、我々世話人を含めた当慰霊祭に参加されるご遺族も年々高齢化して、誠に残念ではありますが、組織だった慰霊祭は、今回を最後に終わらせて頂くことになりました。」

3 この慰霊祭は、(旧)熊谷陸軍飛行学校荒鷲之碑奉賛会と航空自衛隊熊谷基地との共催により実施されたものである。参列者は、ご遺族等約60

4 駅からの送迎バスの運行、隊門から慰霊碑までの誘導案内、会場の受付、待機場所、テント、椅子の設営、PXの休日臨時開店、懇親会への準備、案内のため、受付において、記念写真帳が配布された。その最後に、関利雄会長の編集後記として、次のような挨拶が載せられていた。私達の協会は、今

7 また、その懇親会の席上で、白田智子理事他の皆さんが、旧陸軍桶川飛行学校の跡地保存活動の紹介をされ、協力を訴えられた。

8 今回の慰霊祭が、荒鷲之碑奉賛会が主催する最後の慰霊祭であった。このため、受付において、記念写真帳が

9 なお、最後に、航空自衛隊熊谷基地指令國分将補から、「来年からは、4月第1日曜日に、航空自衛隊でこの荒鷲之碑慰霊祭を実施していく。当日の有志の参加は歓迎する。」旨の発言があり、嬉しくかつ心強く感じた。

以上

平成21年度都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭

理事 栗原 宏

平成21年4月6日(月)、都城市郊外の都島公園で行われた標記の慰霊祭に、当協会を代表して参加した。

昭和20年4月6日、特別攻撃隊第一陣の第一特別振武隊が、都城西飛行場から沖繩に向けて出撃した、その日に合わせて行われる、この慰霊祭は、今年で32回目である。

ここ都城市は、南九州では、鹿児島市、宮崎市に次ぐ都市で、人口17万、



はやて 都城特攻振武隊疾風慰霊碑



大テント一杯の参列者



献茶・呈茶 (野点)



当協会の供花 (右端)

宮崎空港から高速道をバスで約1時間、鹿児島市とのほぼ中間点に位置する。

前夜宿泊したホテルには、この慰霊祭に参加する方々が10名位泊まっていたので、ホテルのマイクロバスで会場まで送迎していただいた。この公園は、地元の方は陸軍墓地と呼び、園内には、戦没者の慰霊碑や納骨堂等八つの建造物が並んでいる。向かって左端にある「都城市特別攻撃隊戦没者慰霊碑」の前が会場で、全面にテントが張られている。後方は芝生の広場で、地元の「裏千家淡交会都城分会」のご婦人の方々が野点で参加者をもてなしてくれる。

定刻11時、主催者・都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会の永峰誠会長(都城市長)の祭文に始まり、追悼の辞(陸士第57期生代表)など、式次第に沿って整齊と進められ、最後に遺族を代表して鹿児島市の永田利弘氏が「兄(第60振武隊永田利夫伍長・少飛14期)の遺影は19歳のまま、私達家族を見守ってくれている」と挨拶して、参列者に深い感銘を与えた。式典は12時30分滞りなく終了した。

参列者は、遺族、来賓、戦友、一般市民等約370名で、一同心から特攻隊戦没者の冥福をお祈りした。この都城市には、東、西両飛行場があり、資料によると、東飛行場は、昭和19年の前半に、海軍が地元住民の協力を得て、水田を飛行場に急造したもので、表面がでこぼこの誘導路は、蛸の足が伸びた形をしており、南北1500メートル、東西500メートルぐらいで、もちろん滑走路等はなく、自然の草原さながらであったため、西飛行場のような激しい空襲を受けることなく、最後まで特攻機が出撃できた。また、西飛行場は昭和8年、都城歩兵第二十三聯隊が満洲事変から凱旋したのを記念して、昭和9年末に、一般市民及び諸団体の勤労奉仕等により建設されたもので、ほぼ正方形の対角線上に舗装のない滑走路が作られ、昭和20年4月頃まで1200メートルの長さに延長された。しかし、米軍のB-29の爆撃を受け、4月中頃には出撃できなくなり、大半は東飛行場から出撃した。

両飛行場から発進出撃した特攻戦没者は79名で、陸士57期生を隊長として編成した20歳前後の少年飛行兵出身者が多い。このためか、式典で両出身者十数名が集まり、加藤隼戦闘隊等の軍歌を斉唱し、長い年月を経ても、戦友を偲ぶ年老いた後ろ姿が印象的であった。

萬世特攻慰靈碑第38回慰靈祭に参列して

評議員 飯田 正能

平成21年4月12日(日)、鹿児島県南さつま市(旧加世田市)の萬世特攻平和祈念館前にある、萬世特攻慰靈碑「よろずよに」の前において執り行われた第38回慰靈祭に、当協会を代表して参列した。万世特攻平和祈念館と同

特攻慰靈碑を訪れたのは、平成14年11月8日に開催された陸士第61期生会全国総会・鹿児島大会の際の観光旅行で、知覧と同時に訪れて以来7年振りのこ



慰靈祭式場 (万世特攻平和祈念館と慰靈碑前)

とであった。

当時の加世田市長は、同期生の吉峯良二氏であった。彼は多年にわたり加世田市の市長を務めると共に特攻慰靈碑奉賛会会長として特攻平和祈念館の整備充実と特攻隊戦没者の慰靈顕彰事業に尽くしてきた。その功績に対し、この慰靈祭を機に特別功労者として、川野信男南さつま市長兼慰靈碑奉賛会会長から感謝状の贈呈が行われた。同期生として喜ばしいことであると共に誇りとするところである。

万世基地は、知覧基地などとは違い、昭和20年最初に漸く概成された、急拵えの秘密飛行場で、同年3月末から使用が開始されたが、間もなく沖繩戦が始まったため、この基地を飛び立ち、沖繩周辺で特攻散華した英霊は201柱に及ぶという。その中には、子犬を抱いた少年飛行兵の報道写真で有名になった、第72振武隊隊員荒木幸雄伍長(少飛15期、群馬県桐生市出身、17歳)



慰靈碑「よろずよに」

始め若い少年飛行兵連が大勢含まれており、その遺族の方々も慰靈祭に参列しておられた。

今回の慰靈祭参列者は、300名を超える多数であったが、中でも、この日、この慰靈祭のために全国から参集した遺族、戦友の方々それぞれ70名を超える多数に及んでいた。勿論、高齢の方々が多いが、遺族の中には二世三世の若い方も見受けられた。何と言っても肉親や知人がこの地から飛び立つて征った最後の地である、その面影を偲ぶ終焉の地との思いが深いのである。祈念館の中でも、遺影や遺書に涙し、掌を合わせる縁故の方々が見受けられた。

我々よりも遙かに年若と思われる川野市長は、奉賛会会長としての追悼の言葉の中で、今日の平和と繁栄は、英霊達が自らの命を擲って祖国を、家族を、愛する人々を護って下さったお陰であり、英霊達の尊い志を受け継ぎ、その偉功と愛の精神を「よろずよに」語り継ぎ、永遠の平和を守っていくことを誓った。

い日本、誇りある民族、そして何よりも平和を守って行きたいと、力強く「青年の誓い」を述べたことである。

この日の南薩摩は快晴に恵まれ、気温26度という真夏日ではあったが、萌黄色に輝く丘陵地帯、所々に八重桜が咲き、早苗がそよ風になびく田園風景は、真に心を和ませてくれる美しい姿であった。そして何よりも、心を癒してくれたのは、地元の人々の温かいもてなしであった。大勢の婦人達の奉仕で、手打ちそばや握り飯が振る舞われたが、遠来の人々を温かく迎えようとする、郷土の人々の素朴な真心に触れたことである。かつての美しい日本、美しい日本人の心に触れた思いがした。

更に嬉しかったのは、この慰靈祭に多くの若い学生達が参列し、代表として全近畿学生文化会議の坂直純君が、自分たちと同年配の特攻勇士達が、日本未来にかけた志を受け継ぎ、美し

献 詠

護国の母に題す

錦城会 島田 馨せいや

戦雲は速し 万里の征野

關魂火と燃ゆ 祖国愛

雄魂華と開く 大和魂

母情秘めて 愛児を駅に送る

召され征く我が愛し児ぞ若さくら

見送る母の胸に咲くかな

死生命あり 戦場の裡

武運を祈りて 備う銃後の楯

母子俱に尽くす 忠烈の道

心血結び合いて 皇国を護らん

平成21年度 豫科練雄飛会慰霊祭

評議員 小倉 利之

平成21年4月6日(月)、豫科練雄飛会(堺 周一会長)の平成21年度慰霊祭が靖國神社で行われました。

慰霊祭は、1期生から24期生までの乙種飛行豫科練習生に、ご遺族、来賓を加えて約300名が参集殿に集い、正午から約50分間行われました。

靖國神社境内の桜花は、3月21日に開花宣言があったものの、その後低温の日が続いたため、開花が遅れていましたが、この日の慰霊祭に合わせたかのように丁度満開となり、ご遺族始め



当協会の供花



慰霊飛行
(海自鹿屋基地)



追悼のこたば (川野市長・奉賛会会長)



遺族献花



大テント内一杯の参列者
(前列左端 川野市長・奉賛会会長)



万世特攻平和祈念館内・掲額



満開の桜の花の下での受付風景

参集者は皆、満開の、靖國神社の桜の花の下での再会に満足そうでした。

慰霊祭は、国歌斉唱、修拔、献饌、祝詞奏上、祭文奏上(堺会長)、献歌(全員で「同期の桜」斉唱)の後、2班に分かれて本殿に昇殿参拝、「国の鎮め」の奏楽のうちに、玉串奉奠、黙禱、撤饌、直会神酒、退下で、祭典は滞りなく終了いたしました。

豫科練雄飛会戦没の御霊は、国難を憂えて全国より集まり、自ら求めて厳しい訓練に耐え、その志を果たしました。支那事変から大東亜戦争まで、豫科練出身者は海軍航空の中核となり、北はアリューシャンから南はインド洋まで、総ての航空戦を戦い、赫々たる武勲を立てました。

国防とは、ある時代のある世代が、国家存続のため、尊い生命を犠牲にす

る崇高な行為であります。それ故、後世の者が戦没者に感謝し、顕彰し、追悼しなければなりません。それがなければ、国難が到来した時には、誰が自分の生命を犠牲にするでしょうか。毎回慰霊祭に参加してそのことを考えます。今の日本は、その心も忘れてしまったのでしょうか。残念でなりません。慰霊祭に、子供や孫達の参加を求めたいと思います。

日本は、素晴らしい国であります。この国の、古来よりの美德である、人類愛、祖国愛、郷土愛、家族愛を更に高めるべきだと思えます。

慰霊祭の後、靖國會館前で記念撮影が行われ、その後同会館2階で直会、招魂観桜会が開かれました。ご遺族、

来賓の方々も雄飛会の皆様も、積もる話に、楽しい一時を過ごされ、亡き戦友たちも、多分満足されたことでしょう。

第55回 知覧特攻基地戦没者慰霊祭

副会長 杉山 蕃

知覧特攻基地戦没者慰霊祭は、本年も5月3日(日・憲法記念日)、好天の下、知覧平和公園内施設で荘厳に執り行われました。参加者も例年通り、多数の関係者が出席し、立派な慰霊祭となりました。誠に嬉しいことと考えられています。川辺郡知覧町が南九州市知覧町になって2回目の慰霊祭ですが、「知覧」の地名が残ったこともあり、従来と変わらぬ雰囲気定着しつつあるのも結構なことと感じました。

今年の特徴は、高速道路料金制の変更に伴う観光客の増加でした。全国何処へ行っても千円の影響は大きなものがありました。特に鹿児島は、高速道の終点の印象があり、例年に比し大量の遠隔地ナンバーの車が目立ち、活気溢れる雰囲気でした。鹿児島から知覧に向かう二つのルート、指宿スカイライン、海岸線(225号)共に大渋滞

靖國神社は、今年御創立140年という節目の年を迎え、また、雄飛会も会長が交代し、戦後60余年が経過して英霊と直接ご縁のあるご遺族、戦友各位

の状態でした。この影響か、航空便も大変な混雑で満席が続き、私共は前々日、熊本経由の移動となりました。お陰で久しぶりに軍都熊本に1泊、熊本城を訪れる機会に恵まれました。十数年振りの訪問でしたが、天守、本丸以外の再建は進んでおらず、残念な気がしましたが、城郭規模が雄大なだけに、是非復元して清正本流の美を再現して欲しいと思つた次第です。

二つ目の特徴は、徐々に世代交代が続いていることでした。関係諸団体の代表の方々は、それぞれにご健在で、元気な姿を見せておられました。自衛隊現役を始め、参加者の多くは次の世代と言われる階層になりつつあります。時の流れとともに必然のことです。

が、戦友慰霊の趣旨から、「先の時代に、国に殉じた英霊」を弔い、その心情に思いを馳せて、自らを鞭打つ厳しさの糧とする流れが定着して欲しいものと考えるところです。

それにしても、南薩摩の美しい新緑、麓川の清楚な流れに恵まれつつ、見事に整備された献灯の街路、特攻隊とし

も年々減少の一途を辿る中、英霊に対する意識の希薄化と今日の荒廃した世情はいよいよ顕著になりつつあります。雄飛会も、新しい執行部の下で、力

て散り逝つた人々への思いを凝縮し、留める意味からも、この行事を立派に繋いで行くことが、「続く世代」の重要な課題であることを痛感するところです。

その後、知覧特攻慰霊顕彰会の福元作男会長から、次のような御丁寧なお礼状を頂戴したので、御披露いたします。

を終えて

風薫る初夏の候、関係各位には益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。

今年は節目の、第五十五回知覧特攻基地戦没者慰霊祭を例年の通り五月三日に挙行し、開式に先立ち、海上自衛隊機による慰霊飛行、平和の鐘に引き続き、本町特産の新茶が日本礼道小笠原流の方々により献茶が特攻勇士に捧げられました。

開式に引き続き参列者全員で一千三十六柱の御霊に黙祷を捧げ、読経の流れる中、遺族関係者の代表が焼香をしました。

強く、会の発展と会員の更なる団結を図り、皆様のご健康で慰霊行事が続けられますよう、心からお祈りいたします。

次に、追悼の言葉を、知覧特攻慰霊顕彰会会長が「特別攻撃隊による特攻作戦がとられ、特攻散華された一千三十六柱の尊き御霊に對し衷心より哀悼の真を捧げます。知覧特攻慰霊顕彰は今後も縁りの地において、しっかりと受け継いで参ります」と述べました。

次に、鹿児島県議会を代表して地元選出の議員、南九州市議会議長が慰霊の言葉を述べられ、遺族を代表して福岡県在住の今津靖廣様(故今津文廣中佐の長男)が「私の父今津文廣は軍人生涯の仕事として選り、陸軍士官学校に入校、第五十四期生としての教育を受け、昭和十九年浜松において四式重爆撃機二個中隊で編成された飛行第一百戦隊の隊長として、昭和二十年四月二十六日熊本健軍基地を出撃、嘉手納沖において不詳艦二隻を撃沈、二機十四名が沖繩の海に散華、私は父が散華した僅か三か月後の昭和二十年七月に生まれ、父の顔さえ見たこともなく母の手一つで育てられ、母一人子一人でしたが、今では孫にも恵まれ、母と妻と幸せな日々を過ごしております。

御霊らの慰霊顕彰は、今後も引き続き行くとともに、平和の尊さ、命の重さ・大切さ、家族の絆、人と人との繋がりの大切さを、語り継いで行く事をお誓い申し上げます」と、慰霊の言葉述べられました。

次に、偕行会、特操会、少飛会の各



知覧特攻平和観音堂



花と供物で飾られた祭壇



特産の新茶献上



遺族全員による焼香

代表が慰霊の言葉を述べられました。次に、錦城会鹿兒島本部三名により沖縄県・伊舎堂用久中佐、新潟県・長谷川武弘少尉、大阪府・辻中清一大尉、栃木県・菊地誠大尉の遺詠が朗詠されました。

次に、参列者全員により白、黄色の

菊花を英霊にそれぞれ献花し、冥福をお祈り致しました。最後に、陸上自衛隊音楽隊の演奏に合わせて「加藤藤戦闘隊」と「同期の桜」を斉唱し、一千三十六柱の英霊に対し「とこしえに」安らかな眠りを祈り、世界恒久平和を誓い合いました。

以上、当日の慰霊祭の様について御報告申し上げます。(以下省略)

献 詠

誠第十七飛行隊 伊舎堂用久中佐
指折りつ待ちに待ちたる機ぞ来る
千尋の海に散るぞたのしき

第七十六振武隊 長谷川武弘少尉
大君に命捧げて共に行く
死して護らん大和島根を飛行

第十七戦隊 辻中 清一大尉
あをばふく南の空に我散らむ
唯ひたすらに君の御為

第五十五振武隊 菊地 誠大尉
かへらじと思ふころのひとすじに
玉と砕けて御国まもらん

フィリピン特攻基地

慰霊巡拝旅行のご案内

(財) 特攻隊戦没者慰霊平和

折念協会

当協会では、数年振りにフィリピン特攻基地等の慰霊巡拝旅行を計画しております。

会報『特攻』第79号(平成21年5月号)で既に旅行のご案内をしておりますが、人員及び期限等の制限がありま

すので、旅行に参加される予定の方は、来る8月末日までに、当協会事務局まで電話又はFAXでお知らせください。

電話 03-5730-1016
FAX 03-5730-1017

巡拝旅行の計画は、別表「旅行日程表」のとおりとなりますが、現地での宿泊は2〜3名1室で企画されてお

り、個人負担の費用は、往復の航空運賃並びに現地での宿泊料、食事代、移

動バス代、航空運賃等を含めて一人当たり約19万円程度となっております。その他個人で使用される電話代、飲食代等は別途必要となります。

なお、慰霊祭当日の献花、玉串料、その他各地での祭祀費用等につきましては、当協会が負担する予定です。

現地クラークでの慰霊祭が実施される10月25日は、海軍の関行男大尉を長とする敷島隊が、神風特攻隊の先駆けとしてマバラカット基地から飛び立っ

て敵艦隊に特攻散華された日であり、

現地の方々の誠意に応えるためにも、この慰霊巡拝旅行を通じて、特攻隊戦没英霊の慰霊顕彰のため、多くの方々がこの慰霊祭に参加されることを、当協会としても心よりお待ちしております。

比島特攻基地慰霊巡拝旅行日程表

番号	日付	都市	交通機関	時間	行程	食事
1	10月24日 (土曜日)	成田発 マニラ着	PR-431	09:30 13:10	フィリピン航空にて空路マニラへ マニラ到着・通関後、バスにて クラークへ <途中、在日本大使館表敬訪問 マバラカット市長表敬訪問> クラーク泊	朝：－ 昼：機内 夕：ホテル
2	10月25日 (日曜日)				クラーク（リリーヒル）の慰霊祭 西・東飛行場の慰霊碑参拝 1 航艦司令部の住居、関大尉以下の 宿舎であった住居見学 大西軍司令部 跡（大西神社） MR. ディソン宅表敬訪問 マニラ泊	朝：ホテル 昼：市内 夕：市内
3	10月26日 (月曜日)	マニラ発 バコロド着	PR-133	09:15 10:35	国内線でネグロス島、バコロドへ バコロド着 タリサイ、シライ、ビクトリアス マナプラ、ファブリカ サガイ市庁舎（市長に表敬） ファブリカ及びロザリオハイツ 記念碑前で慰霊祭 バコロド泊	朝：ホテル 昼：市内 夕：市内
4	10月27日 (火曜日)	バコロド発 セブ着 セブ オルモック	5J125 高速船	09:30 10:10 16:40 19:10	国内線でセブへ セブ着 セブ島慰霊巡礼（病院跡、 セブ観音） 高速船で、レイテ島オルモックへ オルモック着 ホテルへ オルモック泊	朝：ホテル 昼：市内 夕：市内
5	10月28日 (水曜日)	タラバコ発 マニラ着	5J654	16:30 17:45	レイテ島慰霊巡礼<オルモック、 リエン、ダガミ、ブラウエン、 ドラグ、タクロバン> 国内線でマニラへ マニラ着後 ホテルへ マニラ泊	朝：ホテル 昼：市内 夕：市内
6	10月29日 (木曜日)	マニラ発 成田着	PR-432	14:55 20:10	午前 モンテンルパを参拝後 マニラ空港へ フィリピン航空にて帰国の途へ 到着通関後、解散。	朝：ホテル 昼：－ 夕：市内

艦1隻・高速輸送艦2隻・商船3隻・掃海艇1隻に損傷を与え、第45振武隊は藤井中尉以下10名が散華した。妻子の入水自決から5カ月後のことであつた。

藤井中尉は、出撃前「自分が戦死した後、郷里の茨城県水海道市の墓に妻子と一緒に葬ってほしい」と遺言していた。読売新聞平成10年12月20日の記事「特攻秘話家族の真実」によると、「53年ぶり夫と同じ墓に」と題し、実弟の藤井二郎さん(当時76歳・水海道市在住)の話が載っているが、それによると「兄もずいぶん悩んだと思います。兄弟思いのやさしい性格でしたから、中隊長として若い部下を特攻に送り出している以上、自分が行かないと申し訳ないという気持ちが強かったんです。と」と。二郎さんは、今年6月家の近くのお墓を改装し、これまで別々に埋葬していた藤井中尉の髪のと爪を、母子3名の遺骨と一緒に一つの壺に入れて埋葬した、とのことである。

藤井中尉が先に亡くなった子どもたちに残した遺書の一部



「.....
父も近く御前達の後を追って行ける事だろう
厭がらずに今度は父の膝に懐で
だっこして寝ねしようね
それまで泣かずに待っていて下さい
千恵子ちゃんが泣いたらよく御守りしなさい
では暫く左様なら
父ちゃんは戦地で立派な手柄を立てて
御土産にして参ります
では一子ちゃんも千恵子ちゃんも
それまで待ってて頂戴
」

その後更に10年余を経た今年1月、陸軍少年飛行兵学校18期生で新潟県燕市在住の吉田正三氏から、実兄の故吉田正之氏(陸士61期)の同期生宛に手紙と共に「鎮魂と懐古」と表題の付いたCDが送られてきた。正三氏は終戦時、加古川陸軍航空通信部隊に勤務しておられた方で、戦後は郷里の新潟で教育者となり、作曲も手掛けられ、このCDには氏が作曲した「ねがい」、「ああ特攻の母」、「少年飛行兵を偲ぶ詩」

などが収められている。その内の「ねがい」には、戦争による悲劇が二度と起きることなく、いつまでも平和であることを願って、同じく少飛校の先輩である杉山卓爾氏が、筋萎縮症という難病を抱えながら作詞したものに、目下癌と戦っている正三氏が作曲したもので、その歌詞の一部を紹介すると次のとおりである。

① 胸に抱かれて夢見る寝顔
この子残してわしは逝く

お前頼むよ愛し子達を
すまぬすまぬと手を合わせ
わしが育てた若鷺達が
お母さんと呼んで雲の果て
いつも一緒と誓ったでしょう
私残して逝かないで
あなた一人をやりはしません
ついて行きますあの世まで
心おきなくお尽くしてください
ご免ねと詫げる父の胸
② 広く大きなああお父さん
子等を抱きしめお母さん
この手離すな幼子達よ
こんど生まれて来るときも
きつと一緒と誓い合う身に
ああ安らかに風よ吹け

このCDを聞いてみたい方は、次の所宛に500円を添えてお申し込みください。

〒959-0216 新潟県燕市吉田
春日町1-14 「吉田正三」様宛
☎0256-92-4723

事務局からのお知らせ

事務局だより

1 第58回特攻平和観音年次法要について

例年の通り、本年も9月23日(水・秋分の日)に、世田谷山観音寺において、特攻平和観音年次法要が、駒繫神社との神仏習合により斎行されます。その詳細につきましては、同封の案内書に記載しておりますので、皆様お誘い合わせのうえ、ご参加くださるようご案内申し上げます。

2 CD「あ、特攻」及び「特別攻撃隊全史」の頒布について
終戦60年記念として当協会で作製し長年好評を頂いておりますCD「あ、特攻」は、事務局の在庫も少なくなっていました。この程、追加作製しましたので、ご希望の方はお申し込みください。

また、昨年8月15日に当協会で刊行しました『特別攻撃隊全史』については、既にご案内を差し上げておりますが、現時点でお、若干在庫に余裕がありますので、まだ購入されていない方は、この機会に事務局へ、電話又はFAXでお申し込みください。

今年第55回目を迎えた知覧の特攻基地戦没者慰霊祭(5月3日)には、約1200名を超える大勢の方が参加されたようです。特に、若い方々の参加が増えていくようです。在天の鳥濱トメさんも、さぞかしお喜びのことでしょう。この地に来て、特攻出撃して征った若者達が残してくれたものに触れることにより、日本人なら誰でも、何も言わなくても心打たれるものがあります。そして、その感動は先人達への感謝の気持ちに変わって行くはず。

前置きが長くなりましたが、当協会では、日頃より特攻隊戦没者の慰霊顕彰事業に努めておりますところ、今年1月18日から、世田谷山観音寺の月例祭(毎月18日、午後2時〜)当日、祭事終了後夕方頃から三々五々、新宿3丁目の郷土料理の店「薩摩おごじよ」で鹿児島名産芋焼酎を片手に、熱い想いを語り合い、大いに盛り上がりつつあります。会員の皆様、会員以外の方も誘いのうえ是非ご参加ください。お待ちしております。

今のところ、都内在住の30〜40歳代の方々が中心ですが、早い時間であれば

ば、藤田理事長(千葉県館山市在住)も毎回参加されていますので、共に会話をお楽しみください。

世の中に無関心な者が多い中、特攻精神に見られるような純な心を持ち、国や家族を大事にして、国や民族の将来を憂えている仲間

達が集まっています。遠方の方も上京の際には、靖国神社に参拝された後、新宿辺りでお買い物

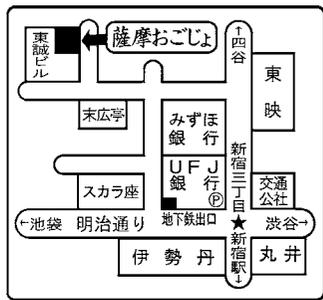
の序でに「薩摩おごじよ」にお立ち寄りください。一同大歓迎です。(因みに、当日は、店の御主人の御好意により会費3千円で盛り沢山の鹿児島・郷土料理と飲み物を提供して頂いておりますので、安心して充分召し上がってください。)



東京の新宿に鳥濱トメさんの味を伝えるお店があります。



右より店主・赤羽潤さんご夫妻



のビルの地下にあって、かの知覧・特攻の母・鳥濱トメさんの孫(二女礼子さんの息子)に当たる赤羽潤さんが経営しています。当協会も大変お世話になってる特攻にご縁の深いお店です(左の案内図等参照)。

暑中お見舞い
申し上げます

財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会

会長 山本卓真
副会長 菅原道熙
同 深山明敏
同 杉山幸生
理事長 藤田幸生
常務理事 栗原宏
事務局長 羽淵徹也

財団法人 偕行社
会長 山本卓真
副会長 齋須重一
同 塩田章
同 志摩篤
理事長 福田一彌
事務局長 菊地勝夫

財団法人 水交會

会長 林崎千明
副会長 福地健夫

同 杉本光
理事長 夏川和也
副理事長 巖壮吉
専務理事 藤田幸生
事務局長 池邑正男

財団法人 海原會

会長 前田武
専務理事 羽田俊一

航空自衛隊退職者団体

つばさ會
会長 村木鴻二
副会長 津曲義光

同 横幕弘
同 山本修三

事務局からの報告等

寄附者御芳名(敬称略)

(平成21年4月1日～6月30日)

(単位千円)

- 一〇〇〇 田中 マス
 - 一〇〇 中台不動産(株)
 - 一五 日比野哲丈 一〇 尼子 和世
 - 三 杉内 省吉 三 岡本 龍一
 - 二 市来 徹夫 二 佐藤 一志
 - 二 山口 二郎 二 原田 誠雄
 - 二 遠山 毅 二 金子 敏夫
 - 二 宇井 忠一 二 平田 重夫
 - 二 定松 操 一 西本 徹郎
- 御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿(敬称略)

(平成21年4月1日～6月30日)

- 北海道 吉田 若永
- 宮城県 田茂 タキ
- 福島県 五十嵐サト
- 群馬県 新井三知夫
- 金谷 美保
- 島田 幸正
- 須田 麻里
- 羽鳥 忠男
- 前田 房子
- 秋山 正隆
- 埼玉県 柏瀬 一朗
- 熊本市 佐賀県 熊本市
- 奈良県 福岡県
- 奈良県 扇田 和男
- 江崎 孝志
- (株)ヤナイ
- 山田千代子
- 石川 珠美
- 加来 里美
- 愛知県 伊吹 瑞保
- 宮城県 宮永 鐵郎
- 加藤 駿一
- 遠山 毅
- 長野県 黒谷久美子
- 富山県 荒田 義雄
- 田中 マス
- 新潟県 田中 マス
- 神奈川県 大橋 昭彦
- 渡邊 拓
- 目目澤朗子
- 中手川 啓
- 須貝 智行
- 塩谷 良郎
- 小山誉四郎
- 國吉 實
- 越智 秋広
- 相川 広秋
- 松本 聖二
- 安味 貞嘉
- 瀬立 光夫
- 千葉県 松原 廣道
- 中村 実
- 大谷 利勝
- 菊池富士雄
- 小西 章子
- 坂牛 昭
- 神部 節男
- 杉内 省吉
- 林 幸子
- 渡辺 克己
- 長嶋 澄江
- 太田 雅久
- 森本 一秀
- 小野寺正芳
- 柏井 隆
- 田中 弘俊

鹿児島県 有迫 貴史 市来 徹夫
 鹿嶋 信一
 米 国 ロバート・ママダ

◆ ◆ ◆
会員訃報 (敬称略)
 ◆ ◆ ◆

謹んで哀悼の意を捧げます。

茨城県 堤 正紀 (21・5・8)
 栃木県 木村 義朗 (21・6・16)
 埼玉県 中村 敏之 (21・5・11)
 千葉県 大内 輝夫 (21・6・16)
 平野 勝尚 (21・6・15)
 東京都 田島 幸男 (21・2・13)
 中村 武夫 (21・5・14)
 高橋 正二 (21・6・16)
 神奈川県 三澤 鍊一 (21・6・15)
 山下 茂幸 (21・5・11)
 兵庫県 東川 好信 (21・5・7)
 岡山県 林 幹彌 (21・6・16)
 香川県 久詰 忠明 (21・5・14)
 長崎県 中元 亮 (21・5・19)
 赤木 昭 (21・5・19)
 黒木 武夫 (21・6・16)
 宮崎県

会報「特攻」第79号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

- 28頁 1段目本文前から4行目 誤「高木利朗」 正「高木俊朗」
- 3段目後ろから8行目 誤「母のみぞ」 正「母のみもとぞ」
- 33頁 4段目後ろから11行目 誤「見出しのは」 正「見出したのは」
- 42頁 1段目本文前から4行目 誤「深井正明氏」 正「深井正昭氏」
- 2段目前から14行目 誤「市町村町等」 正「市町村長等」
- 43頁 1段目碑文後ろから7行目 誤「その勇姿を」 正「その雄姿を」
- 44頁 2段目前から3行目 誤「荒生和三」 正「新井和三」
- 4段目後ろから5行目 誤「金谷三保」 正「金谷美保」

当協会会員ご入会のご案内

当協会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動が続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○協会の沿革

昭和27年5月設立
 平成5年11月財団法人認可
 初代会長 竹田 恒徳 元宮様
 二代会長 瀬島 龍三 氏
 現会長 山本 卓真 氏

- 協会の主な事業
- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・講演会等の開催
- ・機関誌等の発刊その他
- 年会費
- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

〒105-0014 東京都港区芝2-15-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101

「ご投稿について」のお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願ひします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願ひします。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛としてください。

〒105-0014 東京都港区芝2-15-19 TAビル4階
 (財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局
 電話 03-5730-1101
 FAX 03-5730-1101